第４節　検出遺構

各面について概要

本調査区で確認できた遺構は、数少ない。１面においてSX01遺構、４面から明確な土坑２基を検出したのみである。

面の時期については、各面の下層から出土した遺物から、面の形成と下層の形成時期がそうかけはなれるものではないと考え、時期を判断している。

１面は、１面下層から寛永通寶（新寛永）が出土していることから、17世紀末から18世紀であると考えられる。

２面は、遺構は検出していない。時期は、16世紀の形成である。２面は、調査区の北半部のみで確認している。

３面は、遺構を検出していない。時期は15世紀代。

４面からは、土坑を検出している。３面と同じく15世紀代。

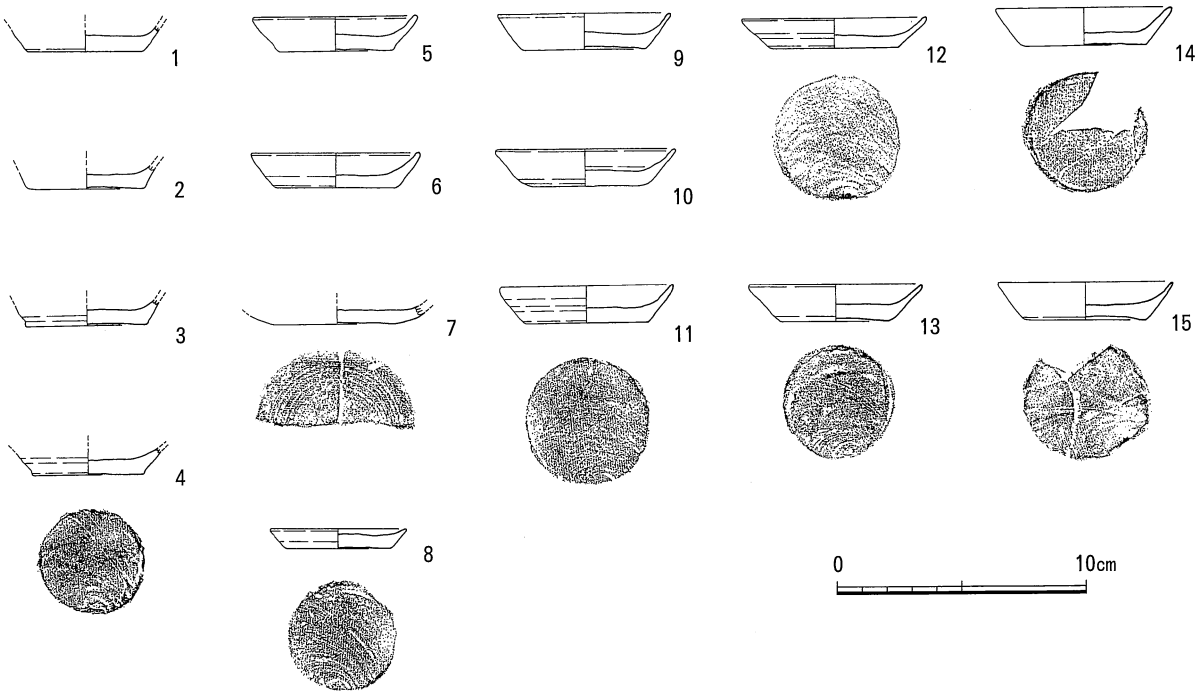
５面は、遺構は検出していないが、下層から縄文土器１点が出土している。

SX01（写真192～193・第108図・表39）

SX01は、第１面上面に土師質土器の皿が東西１ｍ南北0.5ｍの範囲に集中して出土した箇所である。完形の土師質土器が多く、図示できる遺物は15点である。底径は５㎝前後とそろっているが、器高は10㎝と12㎝のものがある。底面は、摩滅により不明瞭なものもあるが、判別できるものすべてに静止糸切り痕が残されている（第108図）。

遺構の性格は、境内周辺部に一括廃棄された土師質土器と考えられる。時期は、１面下層から寛永通寶１点が出土していることから、17世紀後半以降のものであろう。

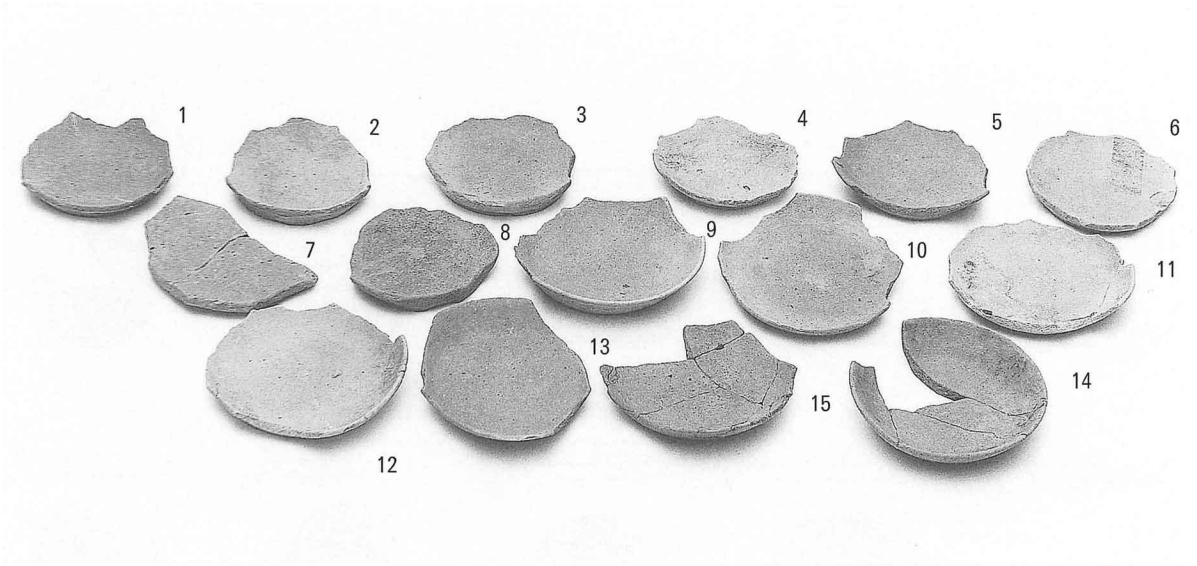
写真192　彰古館北調査区　SX01遺構　遺物出土状況（西から）



第108図　彰古館北調査区　SX01出土遺物実測図（S＝1/3）

表39　彰古館北調査区　SX01遺構出土遺物（土器）観察表（番号は第108図と対応）

番号	層　位	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
1	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	—	—	4.6	全体の80	にぶい褐色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
2	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	—	—	4.6	全体の50	にぶい褐色	密	内外面：回転ナデ	—
3	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	—	—	5	全体の50	にぶい橙色	密	底部：静止糸切り？ 内外面：回転ナデ	—
4	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	—	—	4.5	全体の50	にぶい橙色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
5	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	6.6	1.4	4.6	全体の80	にぶい黄橙色	密	内外面：回転ナデ	—
6	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	6.8	1.4	5	全体の80	にぶい橙色	密	底部：静止糸切り？ 内外面：回転ナデ	—
7	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	—	—	5	全体の30	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り 外面：回転ナデ？	—
8	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	5.4	0.9	4	全体の50	にぶい褐色	密	底部：静止糸切り 外面：回転ナデ	—
9	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7	1.4	5	全体の80	にぶい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
10	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7.1	1.4	4.4	全体の80	にぶい褐色	密	内外面：回転ナデ	—
11	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7	1.4	5	全体の80	にぶい橙色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
12	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7.4	1.2	5	全体の80	にぶい褐色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
13	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7	1.5	4.4	全体の80	にぶい褐色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
14	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7.1	1.4	5	全体の80	にぶい褐色	密	底部；静止糸切り 内外面：回転ナデ	—
15	表土～1	SX01	土師質土器	Ⅲ	7	1.4	4.9	全体の80	にぶい褐色	密	底部：静止糸切り 内外面：回転ナデ	—



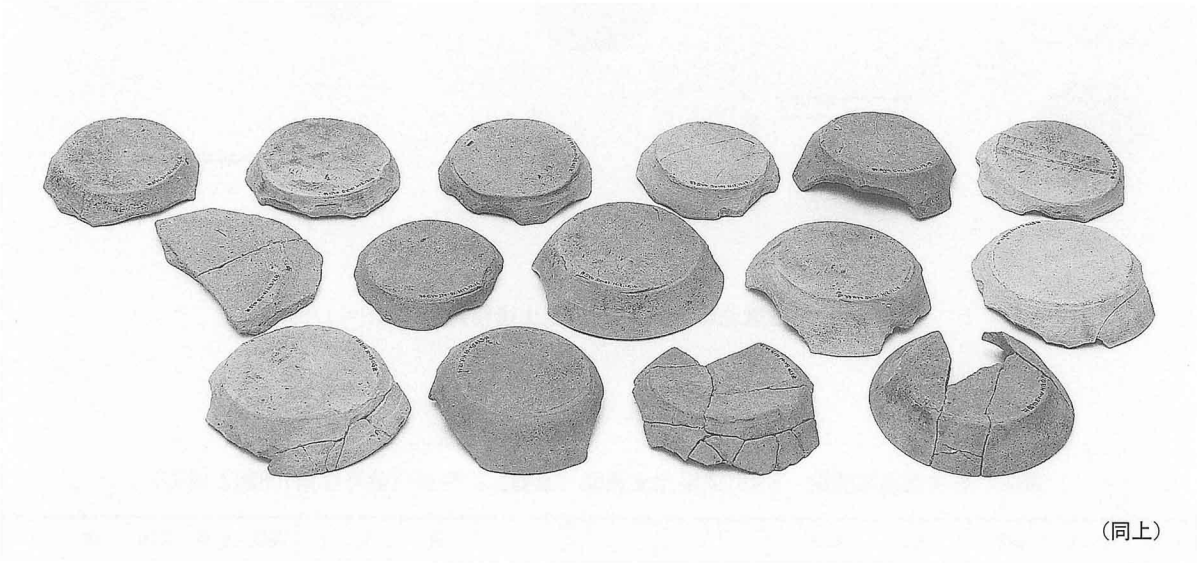


写真193　彰古館北調査区　SX01遺構　土師質土器（番号は第108図と対応）

SK01（第109図・写真194）

規模

SK01は、第４面から検出した遺構である。規模は、1.2m×１mの楕円形をしており、深さ10cmほどの浅い掘り込みで、底面は平滑。

覆土

一括の黒茶色土。炭粒をまばらに含む。底面はベース土が熱変して、硬化している。覆土中から土師質土器の坏・鉄釘が出土している。

性格

火を使用したと考えられるが、性格については不明である。

出土遺物（第111図・写真196・表40～41）

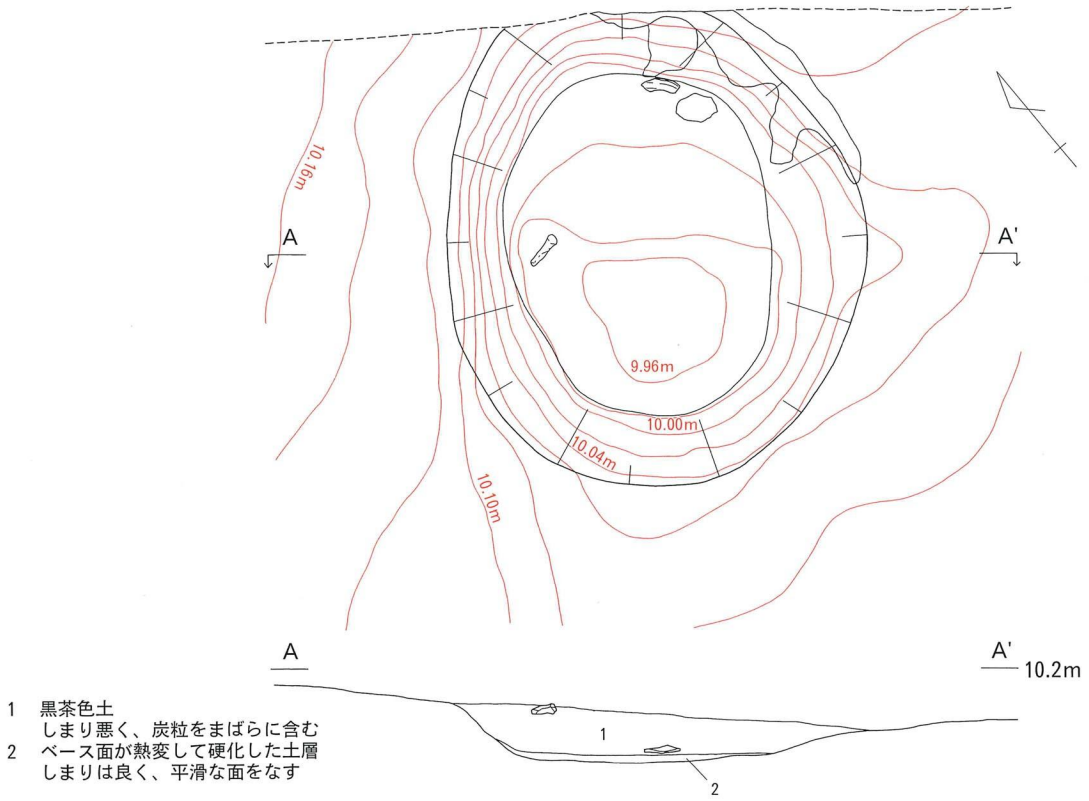
１は、土師質土器の坏である。底部を欠損している。

２は、長さ11cmの鉄釘でほぼ完形である。釘周辺には土砂が付着している。

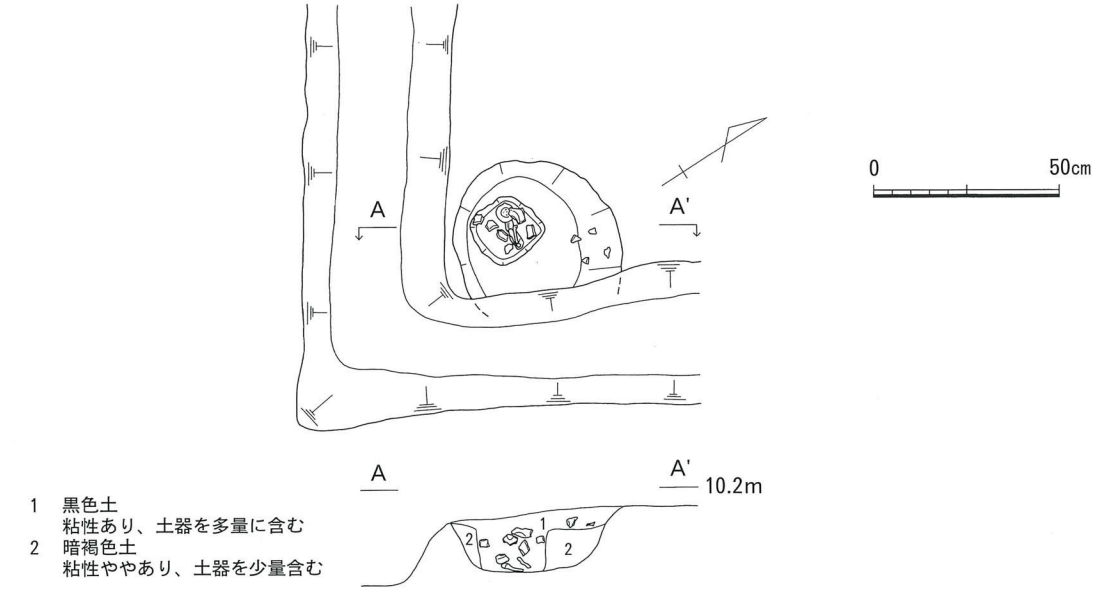
SK02（第110図・写真195）

規模

遺構の一部は、調査区周囲の排水用溝掘りのため完全に検出していない。確認できるのは、



第109図　彰古館北調査区　SK01遺構平面図・土層図（S＝1/20）



第110図　彰古館北調査区　SK02遺構平面図・土層図（S＝1/20）

写真194　彰古館北調査区　SK01遺構　検出状況（南西から）

写真195　彰古館北調査区　SK02遺構　検出状況（南西から）

検出面で35×50cmの不整楕円形をしており、６cmほど堀り下がった段階で、15×15cm方形のプランを確認した。深さは、10cmほどで壁は垂直に立つ。

覆土

黒色土一層のみである。しまりはなく、やや粘性をもつ。土器小破片・鉄器を含む。

性格

平面形が15cmの方形を呈していることから、15cm四方の角柱が立っていたと考えられる。本遺構は、柱の抜き取り跡と考えられる。柱根自体はなく、遺構の上部は、柱の抜き取り時に撹乱されたものと考えられる。時期は、遺構出土の遺物からは時期がはっきりとしないが、４面を形成している層が15世紀であると考えられることから、15世紀をそう下るものではないと考えられる。

出土遺物（第112図・写真197・表42～43）

１は、磨耗が激しいが、土師質土器柱状高台付坏の脚部である。

２は、長さ11cmの鉄釘である。先端部はやや欠損しているが、ほぼ完形である。

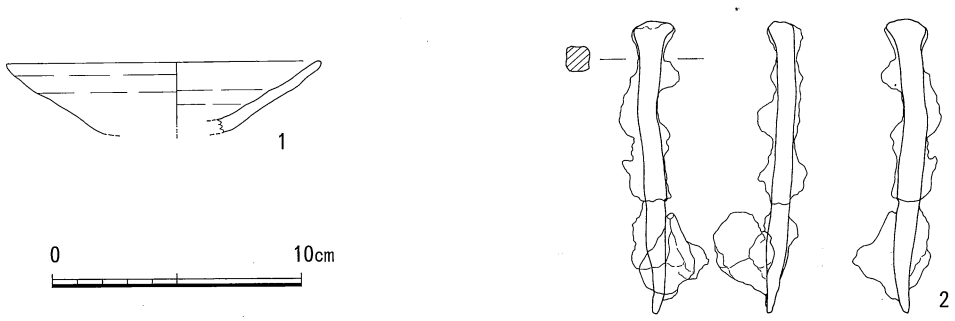
３は、長さ５cm以上の鉄釘である。体部には、赤色顔料が付着している。

第５節　まとめ

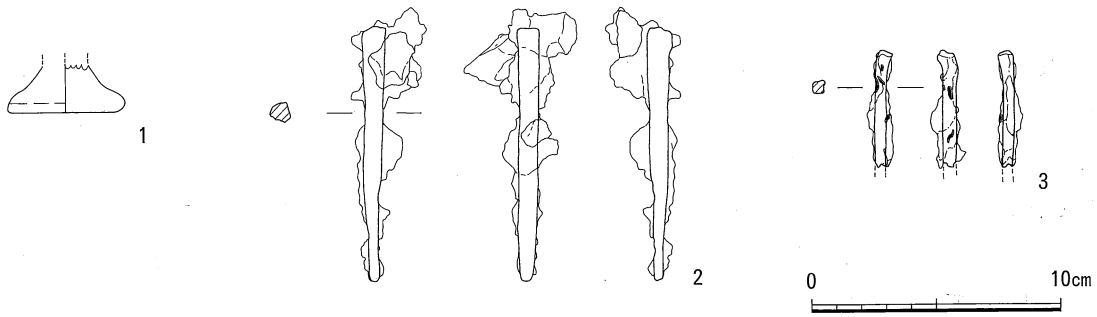
調査区が山裾に近すぎたため、境内として活用される空間からは、やや外れてしまい、境内北部での一般的な遺構の消長を把握できたとはいえない。

しかしながら、５面から縄文時代晩期の土器が出土しており、境内一円での人の活動の始まりが縄文晩期までさかのぼることが確認できた。

そのほか、合計で５面の生活面を確認した。面はすべて造成土ではなく、洪水などで堆積し



第111図　彰古館北調査区　SK01出土遺物実測図（S＝1/3）



第112図　彰古館北調査区　SK02出土遺物実測図（S＝1/3）

表40　彰古館北調査区　SK01遺構出土遺物（土器）観察表（番号は第111図と対応）

番号	遺構名	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
1	SK01	土師質土器	Ⅲ	11.6	—	—	全体の30	灰白色	密	内外面：回転ナデ	磨耗が著しい

表41　彰古館北調査区　SK01遺構出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第111図と対応）

番号	遺構名	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　　考
2	SK01	釘	11.7	頭部幅 0.9×1.5	0.9×0.7	46.54	100	打面；長方形／頭部；端部圧延、折り曲げ、胴部との境にくびれなし

表42　彰古館北調査区　SK02遺構出土遺物（土器）観察表（番号は第112図と対応）

番号	遺構名	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色　調	胎　土	調整／形態/文様	備　考
1	SK02	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	4.4	全体の30	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい

表43　彰古館北調査区　SK02遺構出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第112図と対応）

番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
2	SK02	釘	11	頭部幅 0.6×0.8	頭部幅に同じ	43.46	90	打面：方形／頭部形態：胴部と同じ幅で単純に終わる/木質付着/柱抜き取り跡より出土
3	SK02	釘	4.7	頭部幅 0.6×0.5	頭部幅に同じ	4.17	60	打面：方形／頭部形態：胴部と同じ幅で単純に終わる/全面に赤色顔料付着/柱抜き取り跡より出土

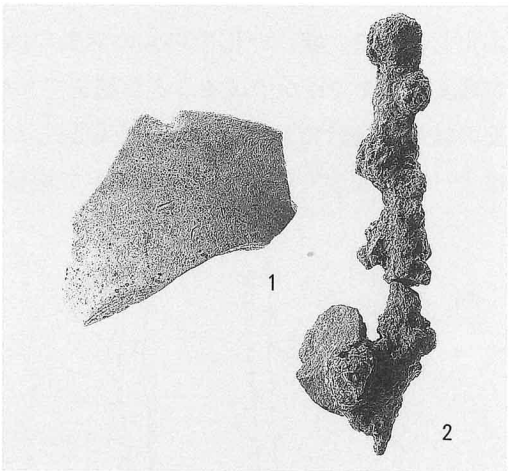


写真196　彰古館北調査区　SK01　出土遺物
（番号は第111図と対応）

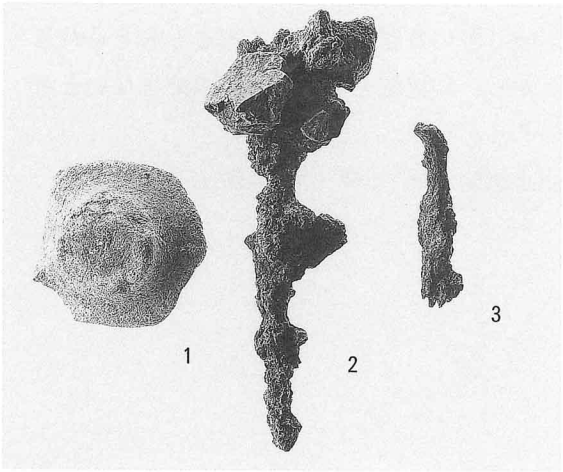


写真197　彰古館北調査区　SK02　出土遺物
（番号は第112図と対応）

た土層の上面を生活面として利用していたようである。

この地点の利用は、15世紀に開始され、４面として整地された生活面と遺構を残している。

その後は15世紀代に３層が、16世紀に２層が17世紀初頭までに１層が順に堆積していくが、明確な遺構はなく、人為的な造作は及ばなかった。

遺物として特筆すべきことは、土師質土器の柱状高台付坏が破片を含めると35点出土していることである。出土状況は、表土から４面下層にいたるまで各層でまばらに出土しており、本調査区北側に所在する八雲山から転落してきた遺物である可能性が考えられる。

遺構として特筆すべきことは、４面の上面からは、遺構が確認されたことである。SK02は、柱根の抜き取り跡と考えられるが、確認できたのは、１ヶ所のみである。おそらく、調査区外南側に建物跡が確認できると考えられる。

第8章

拝殿南の調査

第８章　拝殿南の調査

第１節　調査区の位置

本調査区は、境内拝殿の南側、平成12・13年度の八足門前調査区から南へ約50ｍに位置する。（第113図・写真198）

調査区の北約20ｍには現在の拝殿が、また東側の境内中央部には参拝用の石畳がある。

発掘調査面積は、当初50㎡で調査を行っていたが調査区西側において基壇状の石列が確認されたことから、さらに20㎡西側へ調査区を拡張し、発掘調査総面積は70㎡となった。なお、拡張部分については、重要遺構が検出されたため、約80㎝掘り下げた段階で遺構を保存し、埋め戻しを行なった。

調査面積は、安全勾配をとるため傾斜をつけて掘り進んだため、１層（上面検出時・以下略）67㎡・２層67㎡・３層65㎡・４層32㎡・５層30㎡・６層27㎡・７層24㎡・８層20㎡・９層20㎡・10層７㎡・11層6.8㎡と徐々に狭小となった。

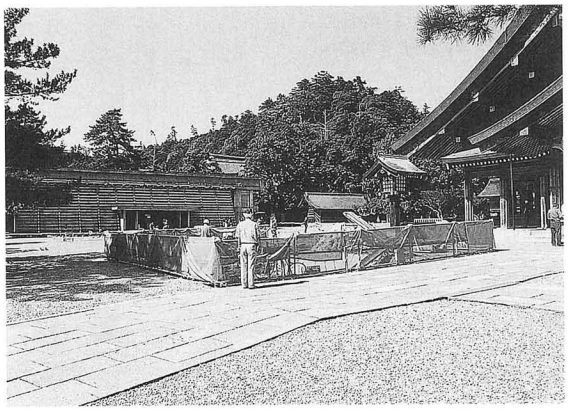


写真198　拝殿南調査区　近景

第２節　調査の目的

調査の目的としては以下の３点が挙げられる。

(1)　巨大本殿遺構に関連する遺構の有無を確認する。

本調査区は、平成12・13年度に八足門前調査区で確認した巨大本殿の中心線（宇豆柱と心御柱の中心を通る線）を延長した場所に設定しており、巨大本殿遺構に関わる遺構が確認される可能性がある。

(2)　境内中央部における境内景観の変遷を明らかにする

境内中央部における土層の堆積状況を明らかにして、各時期の境内景観を明らかにする。

(3)　これまでの発掘調査等における成果との対応関係を明らかにする

本調査区南東側における昭和30年の防災工事地下貯水タンク設置工事や本調査区北側における昭和32・33年の拝殿建設（現在の拝殿地下）における調査成果との総合検討を行なう。

第３節　各層位について

(1)　１層

１層上面では調査区全体で黒色面を確認した。丸釘・溶解した銅破片などが出土しており、昭和28年（1953）拝殿焼失時に伴う炭化物の集積であると考えられる。１層（黒色層）は調査区北東側で約５㎝ほどの堆積が見られるが、南西にいくにしたがって堆積は少なくなる。

出土遺物（第114～115図・写真199～200・表44～45）

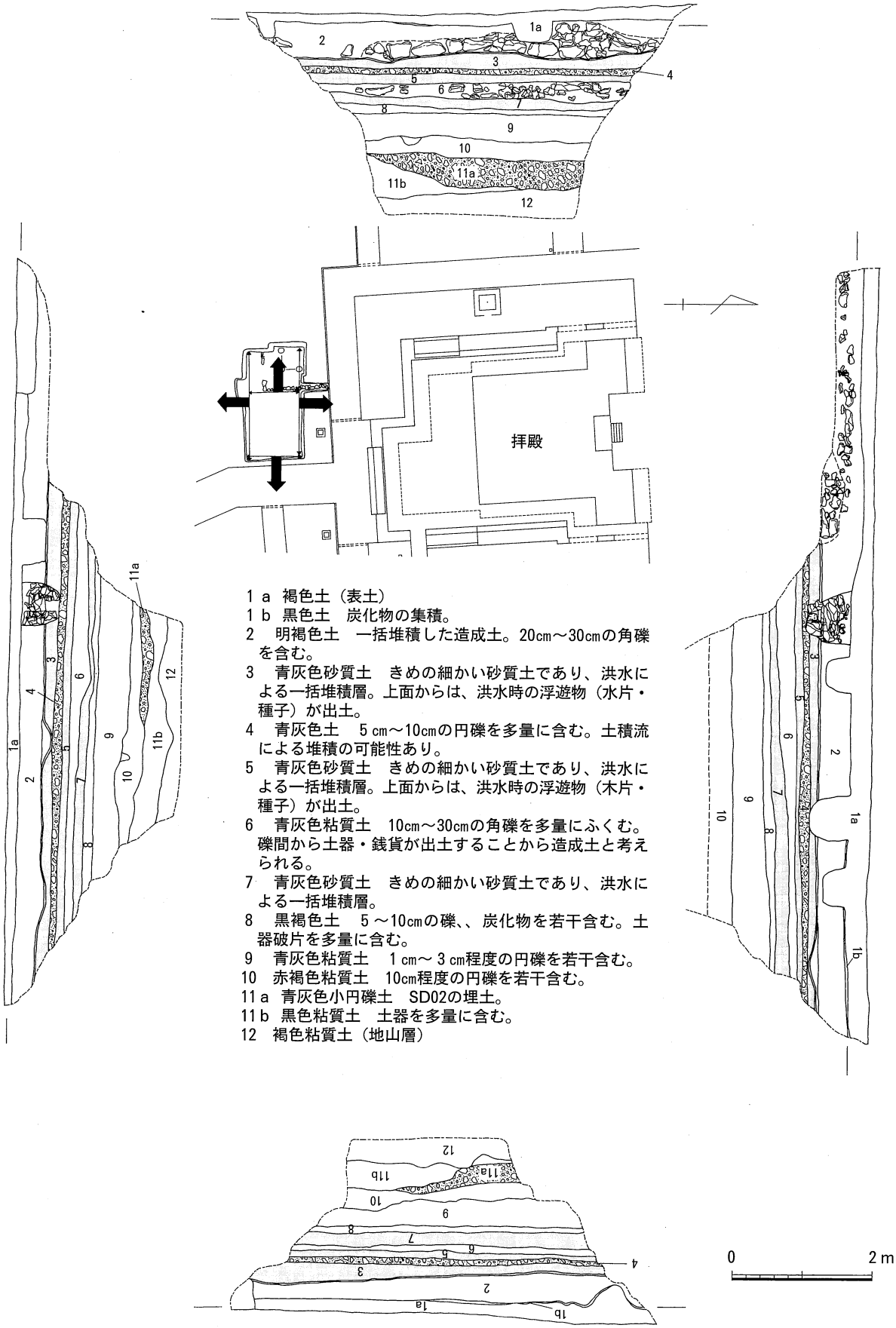
１は、須恵器の坏蓋で天井部回転ヘラケズリがみられる。

２は、管状土錘である。

３・４は土師質土器の皿である。

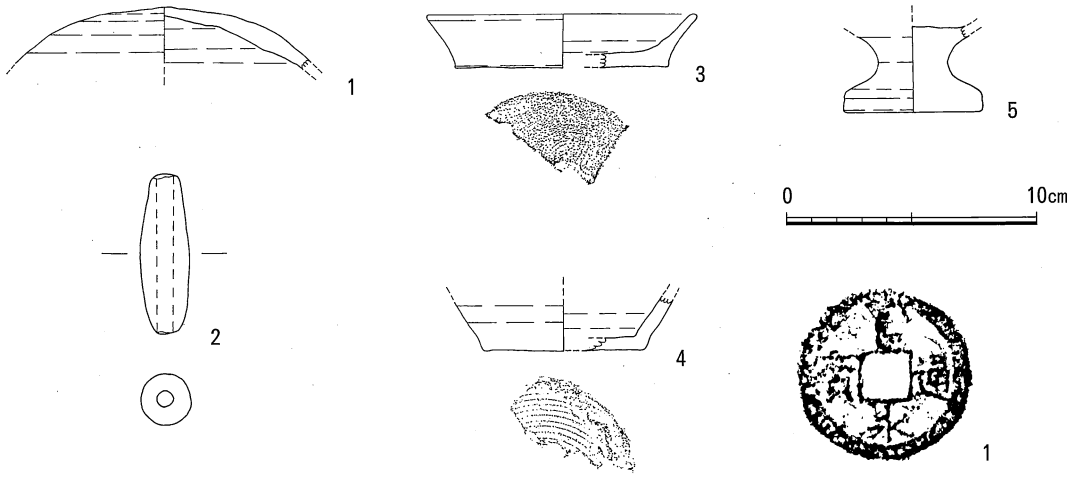
５は、土師質土器の柱状高台付の坏である。

第115図の１は寛永通寶である。

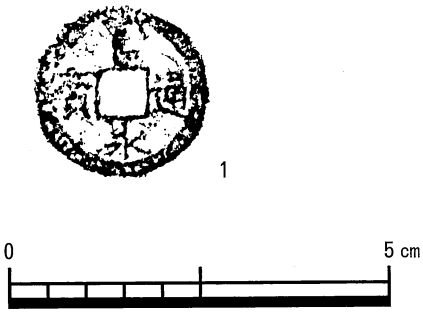


１ａ　褐色土（表土）
１ｂ　黒色土　炭化物の集積。
２　明褐色土　一括堆積した造成土。20㎝～30㎝の角礫を含む。
３　青灰色砂質土　きめの細かい砂質土であり、洪水による一括堆積層。上面からは、洪水時の浮遊物（水片・種子）が出土。
４　青灰色土　５㎝～10㎝の円礫を多量に含む。土積流による堆積の可能性あり。
５　青灰色砂質土　きめの細かい砂質土であり、洪水による一括堆積層。上面からは、洪水時の浮遊物（木片・種子）が出土。
６　青灰色粘質土　10㎝～30㎝の角礫を多量にふくむ。礫間から土器・銭貨が出土することから造成土と考えられる。
７　青灰色砂質土　きめの細かい砂質土であり、洪水による一括堆積層。
８　黒褐色土　５～10㎝の礫、、炭化物を若干含む。土器破片を多量に含む。
９　青灰色粘質土　１㎝～３㎝程度の円礫を若干含む。
10　赤褐色粘質土　10㎝程度の円礫を若干含む。
11ａ　青灰色小円礫土　SD02の埋土。
11ｂ　黒色粘質土　土器を多量に含む。
12　褐色粘質土（地山層）

第113図　拝殿南調査区　土層図（S＝1/80）



第114図　拝殿南調査区　１層出土遺物実測図（S＝1/3）



第115図　拝殿南調査区１層出土銭貨拓影図（S＝1/1）

表44　拝殿南調査区　１層出土遺物（土器）観察表（番号は第114図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整／形態／文様	備考
1	1	須恵器	坏蓋	—	—	—	小片	青灰色	密	天井部：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	—
2	1	管状土錘	—	長さ6.4.　外径1.9 内径0.6			100	にぶい黄橙色	密	—	一部スス付着
3	1	土師質土器	皿	10.8	2.1	8.4	全体で30	にぶい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
4	1	須恵器	坏身	—	—	6.4	小片	褐灰色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
5	1	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	全体で80	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—

表45　拝殿南調査区　１層出土遺物（銭貨）観察表（番号は第115図と対応）

（単位 mm）

銭　名	初　鋳　年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭　厚	量目(g)
寛永通寶	新寛永（1697）	23.05	23.05	18.04	20.3	1.25～1.40	2.92

これらの土器・土製品は撹乱による流れ込みの遺物であると考えられる。

(2)　２層

２層は明褐色の一括に堆積した造成土と考えられる。時期は、出土遺物から寛文度（1667年）もしくはそれ以降の造成土と考えられる。また、最下層からは、厚さ２cmから５cmの赤褐色の鉄分集積が見られた。

出土遺物（第116図・写真201～202・表46～47）

１は、須恵器の坏蓋である。天井部は、ヘラ削りの後ナデ調整されており、大谷分類Ａ６型に分類されるものであろう。

２は、土師質土器の皿である。底部は回転糸切りである。

３は、肥前陶器の皿である。みこみ部分に胎土目積痕のみられる唐津焼である。17前半の年代が与えられる遺物であり、２層の形成年代に近い遺物と考えられる。

４は、鉄製の鎹である。欠損のため、形状がはっきりしないが断面1.2cmの正方形で、90度湾曲することからかすがいであると考えられる。

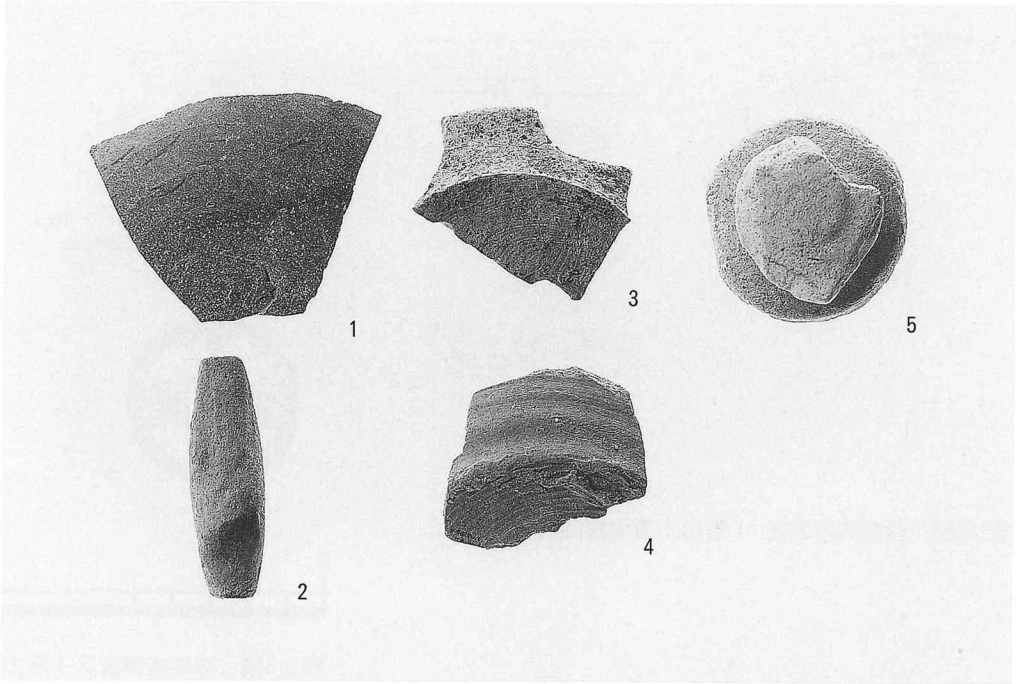
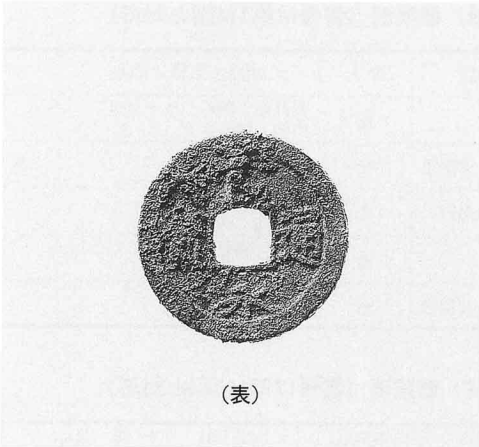


写真199　拝殿南調査区　１層出土遺物（番号は第114図と対応）



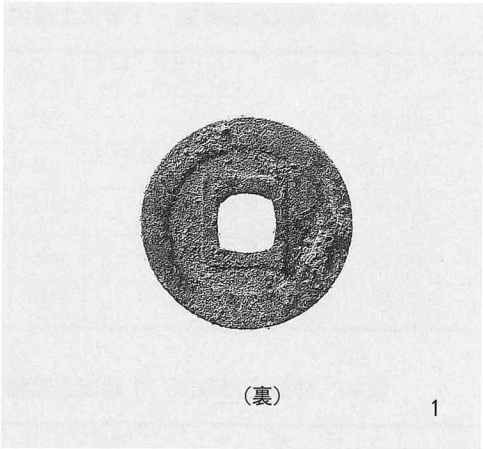


写真200　拝殿南調査区　１層出土銭貨（番号は第115図と対応）

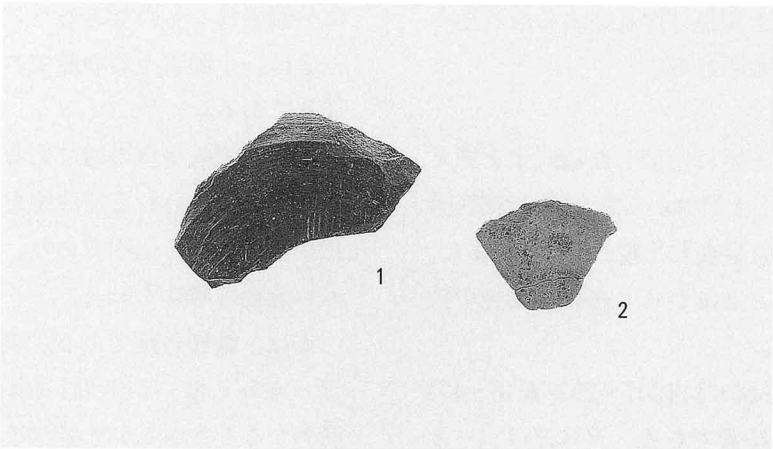
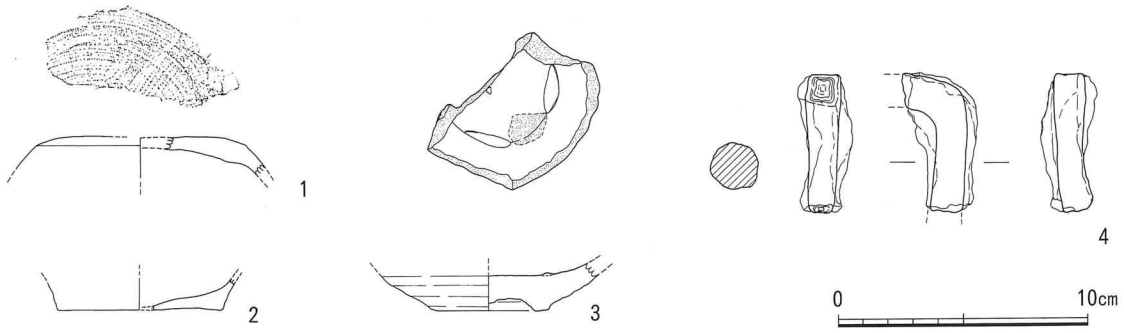


写真201　拝殿南調査区　２層出土遺物（番号は第116図と対応）



第116図　拝殿南調査区　２層出土遺物実測図（S＝1/3）

表46　拝殿南調査区　２層出土遺物（土器）観察表（番号は第116図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎土	調整／形態／文様	備　考
1	2	須恵器	坏蓋	—	—	—	小片	褐灰色	密	天井部：回転ヘラケズリのち平行文 内外面：回転ナデ	—
2	2	土師質土器	皿	—	—	6.4	小片	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
3	2	陶器	皿	—	—	4.8	全体の30	胎土：褐色 釉薬：灰色	密	高台：削りだし、兜巾高台 内面：施釉、残存部に二ヶ所の胎土目積み痕、一ヶ所に砂目積み痕 外面：露胎、回転ヘラケズリ	17世紀前半・肥前系

表47　拝殿南調査区　２層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第116図と対応）

番号	層　位	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　　考
4	2	鎹	背部長4.5 爪部長1.7	背部幅1.2	1.2	31.31	30	背部断面方形 銹化が著しい

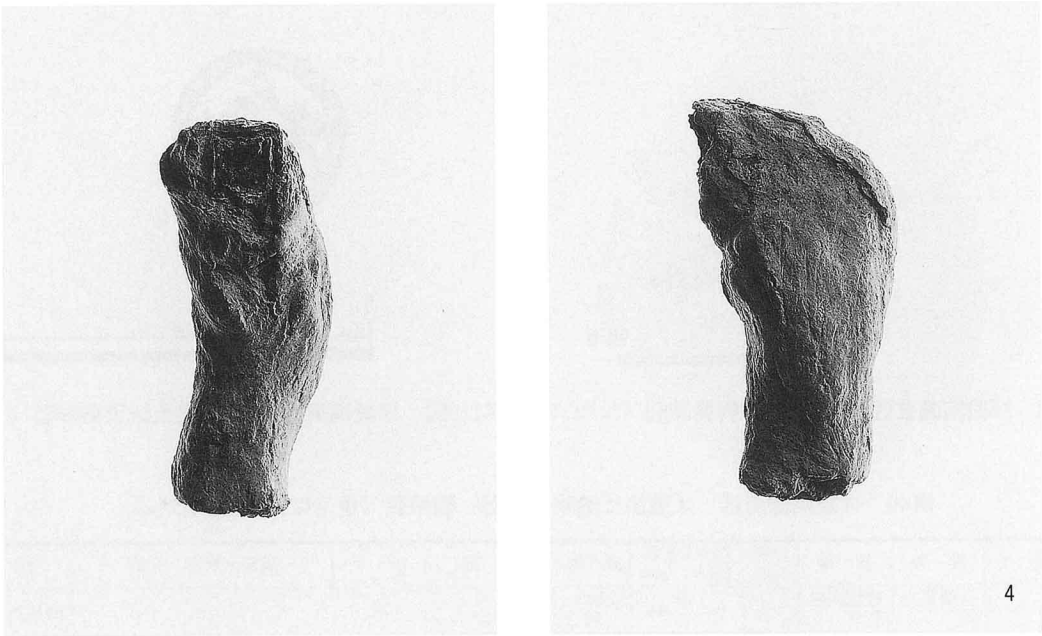


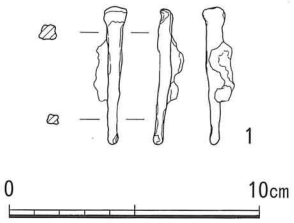
写真202　拝殿南調査区　２層出土鉄製品（番号は第116図と対応）

(3)　３層

３層は、青灰色砂質土で洪水により短期間に形成された堆積層と考えられる。３層上面では、洪水後の浮遊物と考えられる木片や種子が確認された。

出土遺物（第117図・写真203・表48）

１は、鉄製の釘である。長さ5.6㎝でほぼ完形である。



第117図　拝殿南調査区
３層出土遺物実測図（S＝1/3）

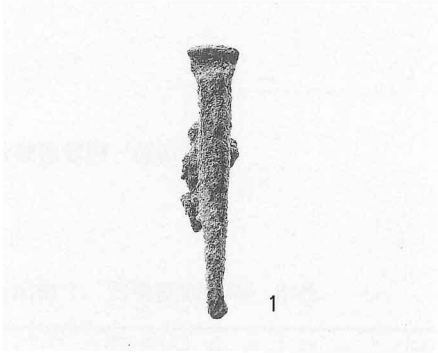


写真203　拝殿南調査区　３層出土鉄製品
（番号は第117図と対応）

表48　拝殿南調査区　３層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第117図と対応）

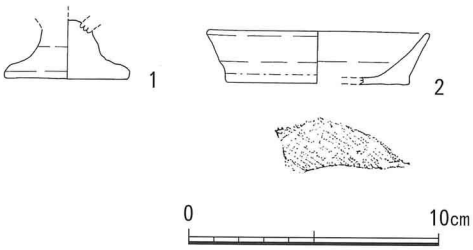
番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　　考
1	3	釘	5.6	頭部幅 0.2×1.0	0.6×0.5	4.96	100	打面；長方形／頭部；端部圧延、わずかに折り曲げ、胴部との境にくびれあり

(4)　４層

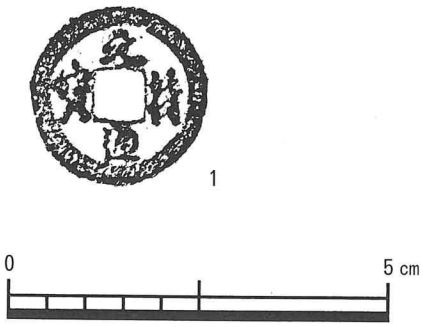
４層は、青灰色土である。一連の洪水により短期間に形成された堆積層と考えられる。

出土遺物（第118～119図・写真204・表49～50）

１は、土師質土器の柱状高台付坏、２が土師質土器の皿である。第119図の１は、北宋銭の元符通寶（初鋳年1098年）が１点出土している。



第118図　拝殿南調査区　４層出土遺物実測図（S＝1/3）



第119図　拝殿南調査区　４層出土銭貨拓影図（S＝1/1）

表49　拝殿南調査区　４層出土遺物（土器）観察表（番号は第118図と対応）

番号	層　位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　　考
1	4	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	4.8	全体の50	淡橙色	密	—	磨耗が著しい
2	4	土師質土器	皿	9	2.1	7.4	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り　内面：回転ナデ　外面：横ナデ	—

表50　拝殿南調査区　４層出土遺物（銭貨）観察表（番号は第119図と対応）

（単位 mm）

銭　名	初鋳年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目(g)
元符通寶	1098	23.74	28.80	18.75	18.90	1.10～1.15	3.05

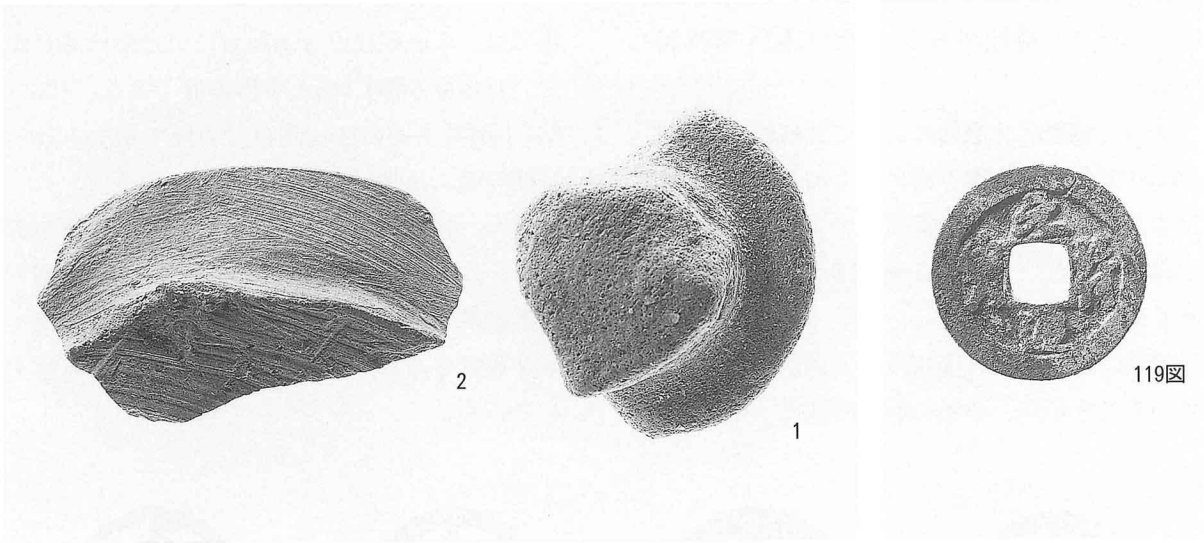


写真204　拝殿南調査区　４層出土遺物（番号は第118～119図と対応）

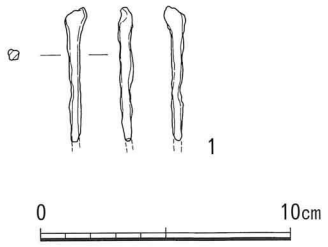
(5)　５層

５層は、青灰色砂質土で洪水により短期間に形成された堆積層と考えられる。５層上面においても３層同様に洪水後の浮遊物と考えられる木片や種子が検出面全体で確認できた。

洪水の時期については、５層中から青花皿C類１点（写真219－17）が出土しており、16世紀前半代の年代が与えられる。また、２層が寛文度の造成土であると考えると、16世紀前半代から17世紀代に発生した洪水により、３、４、５層が短期間に形成されたと考えられる。

出土遺物（第120図・写真205・表51）

１は、鉄製の釘である。長さは5.4cmである。



第120図　拝殿南調査区
５層出土遺物実測図（S＝1/3）

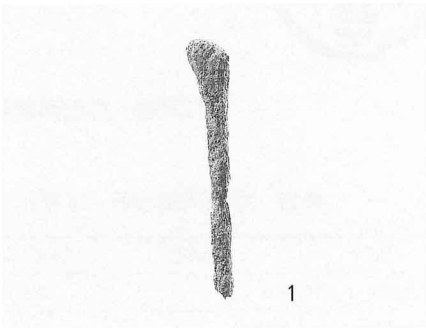


写真205　拝殿南調査区　５層出土遺物
（番号は第120図と対応）

表51　拝殿南調査区　５層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第120図と対応）

番号	層位	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　考
1	5	釘	5.4	頭部幅 0.4×0.9	0.4×0.5	3.82	90	打面；長方形／頭部；端部圧延、折り曲げ、胴部に沿わす

(6)　６層

６層中には30cmから10cm大の角礫が多量に包含していた。礫間には完形の土師質土器（碗）や銭貨が巻き込まれていることから人為的な造成土である可能性がある。（第131図・写真209～210）

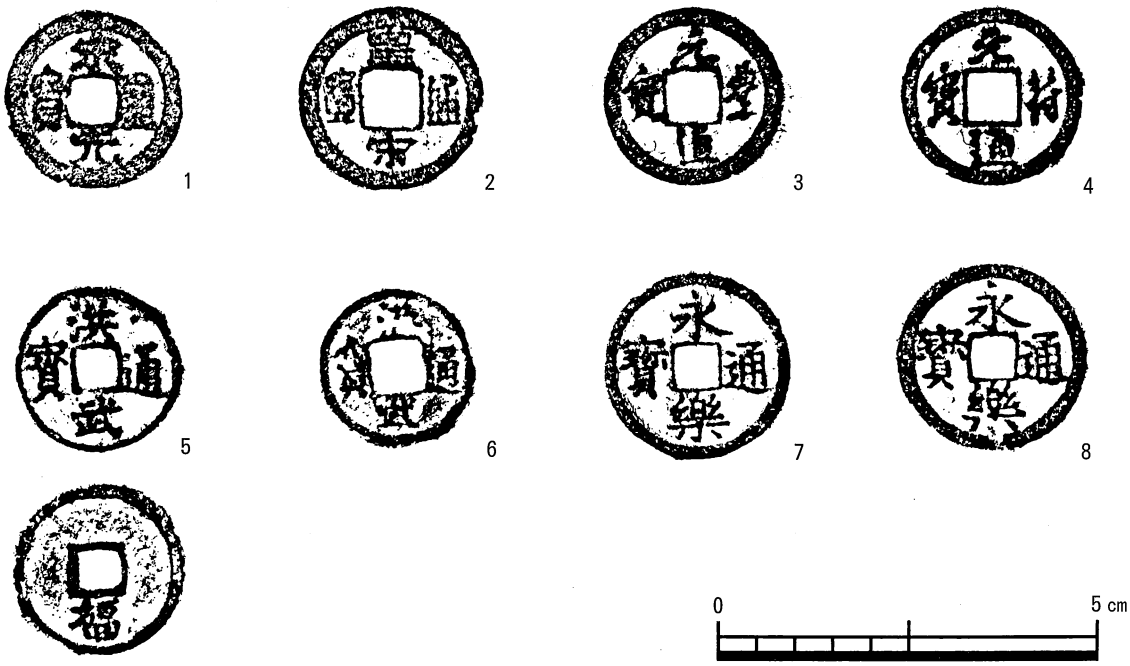
礫は、調査区北西部において比較的集中して出土しており、南東方向にいくにしたがって礫は少なくなる。６層上面において掘り込みなどが確認できないことから礫自体が遺構とは考えにくい。

年代は、層中から模鋳銭の洪武通寶が出土していることから、６層の形成時期は、中世末と考えられる。

出土遺物（第121～122図・写真206～208・表52～53）

１～14は、土師質土器の坏・皿類である。底径では、７cm前後と５cm前後に分けられる。また、14は器高が1.8cmと小形の皿である。15、16は土師質土器の柱状高台付の坏である。15の坏部内面には強いナデ痕跡がみられる。

また、銭貨が９点出土している。このうち判読できるものは、北宋銭の宋通元寶・皇宋通寶・元豊通寶・元符通寶。また明銭は、洪武通寶・永楽通寶である。洪武通寶の模鋳銭が１点出土している。

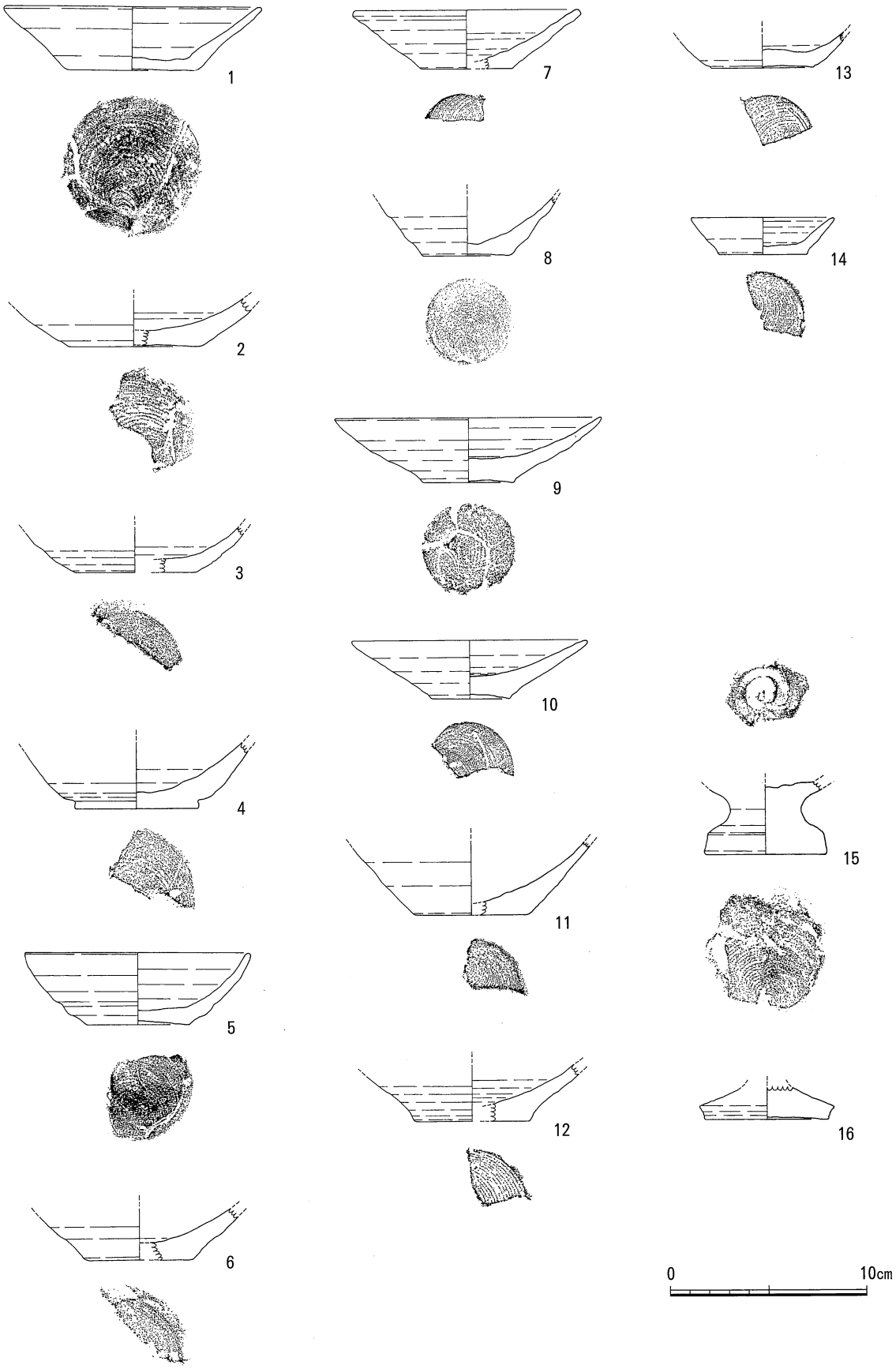


第121図　拝殿南調査区　６層出土銭貨拓影図（S＝1/1）

表52　拝殿南調査区　６層出土遺物（銭貨）観察表（番号は第121図と対応）

（単位 mm）

番号	銭名	初鋳年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目(g)
1	宋通元寶	960	23.90	24.15	18.15	18.65	0.90～1.00	2.17
2	皇宋通寶	1038	24.50	24.65	18.80	19.20	1.04～1.05	2.10
3	元豊通寶	1078	24.00	24.00	19.00	18.85	1.40	3.61
4	元符通寶	1098	24.25	24.20	19.70	19.90	1.20～1.40	2.87
5	洪武通寶	1368	22.53	22.44	20.15	20.20	1.10～1.70	2.96
6	洪武通寶	模鋳銭(中世末期～近世初頭)	20.91	20.90	17.91	17.45	0.80～1.00	1.42
7	永楽通寶	1408	24.90	24.90	21.25	21.21	1.15～1.35	2.79
8	永楽通寶	1408	25.45	25.20	21.00	21.45	1.20～1.30	2.39



第122図　拝殿南調査区　６層出土遺物実測図（S＝1/3）

表53　拝殿南調査区　６層出土遺物（土器）観察表（番号は第122図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　　考
1	6	土師質土器	皿	13.1	3.2	6.5	全体の80	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
2	6	土師質土器	皿	—	—	6.6	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
3	6	土師質土器	皿	—	—	6	全体の30	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
4	6	土師質土器	皿	—	—	6.2	全体の30	淡橙色	密	底部：貼付け、回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
5	6	土師質土器	皿	11.8	3.7	5.6	全体の80	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
6	6	土師質土器	皿	—	—	5.1	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
7	6	土師質土器	皿	11.4	3	4.6	全体の30	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
8	6	土師質土器	皿	—	—	4.5	全体の50	浅黄色	密	底部：回転糸切り 外面：回転ナデ	内面磨耗
9	6	土師質土器	皿	13.6	3.3	4.6	全体の80	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内面：回転ナデ	外面磨耗
10	6	土師質土器	皿	12	2.95	4	全体の50	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
11	6	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	淡橙色、外面褐変色	密	底部：回転糸切り	磨耗
12	6	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ 外面：赤彩	—
13	6	土師質土器	皿	—	—	5	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内面：回転ナデ	外面磨耗
14	6	土師質土器	皿	7.2	1.9	4.4	全体の30	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
15	6	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.4	全体の80	淡橙色	密	底部：回転糸切り	—
16	6	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.3	全体の30	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい

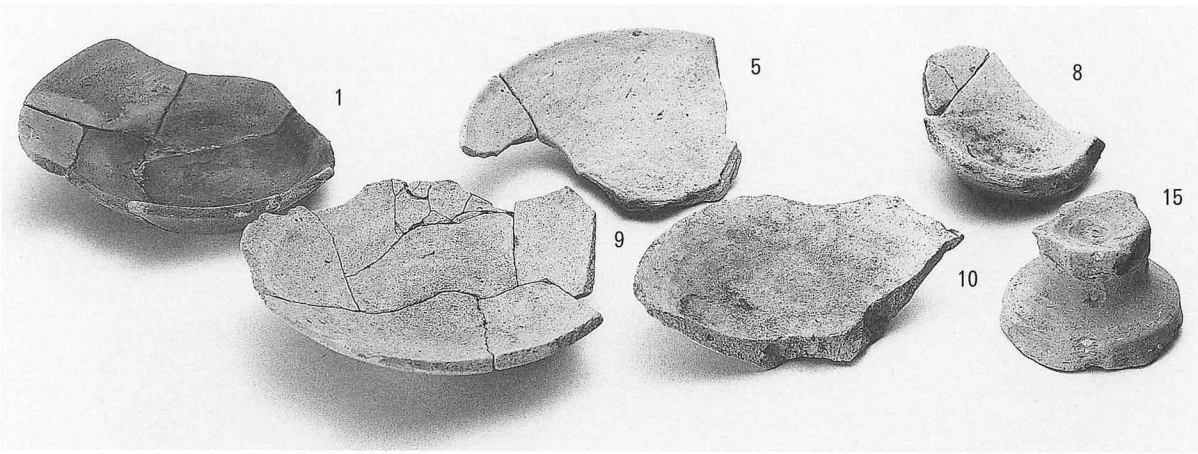


写真206　拝殿南調査区　６層出土土師質土器(1)（番号は第122図と対応）

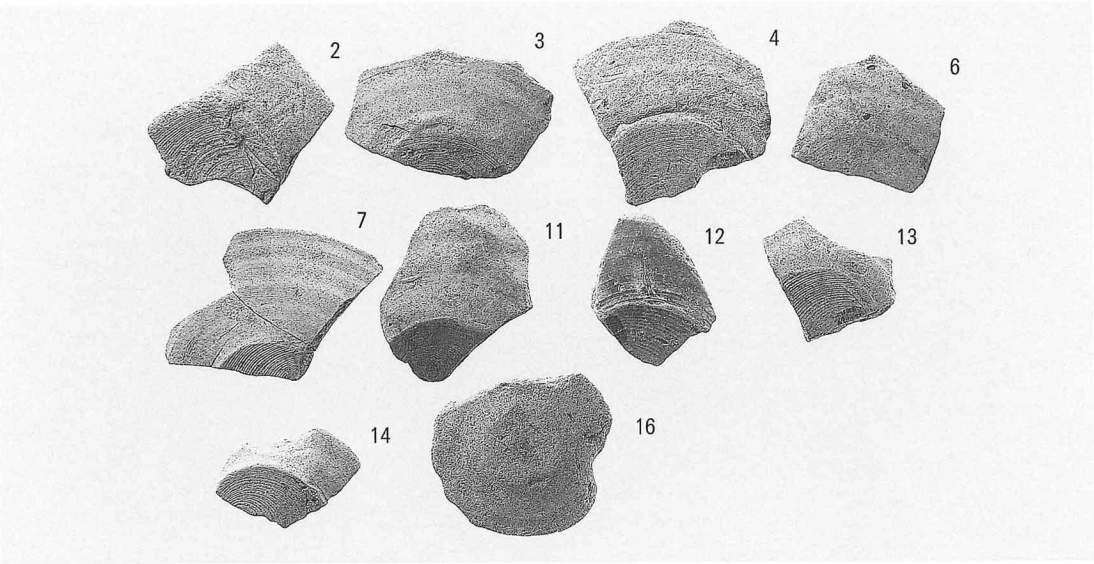


写真207　拝殿南調査区　６層出土土師質土器(2)（番号は第122図と対応）

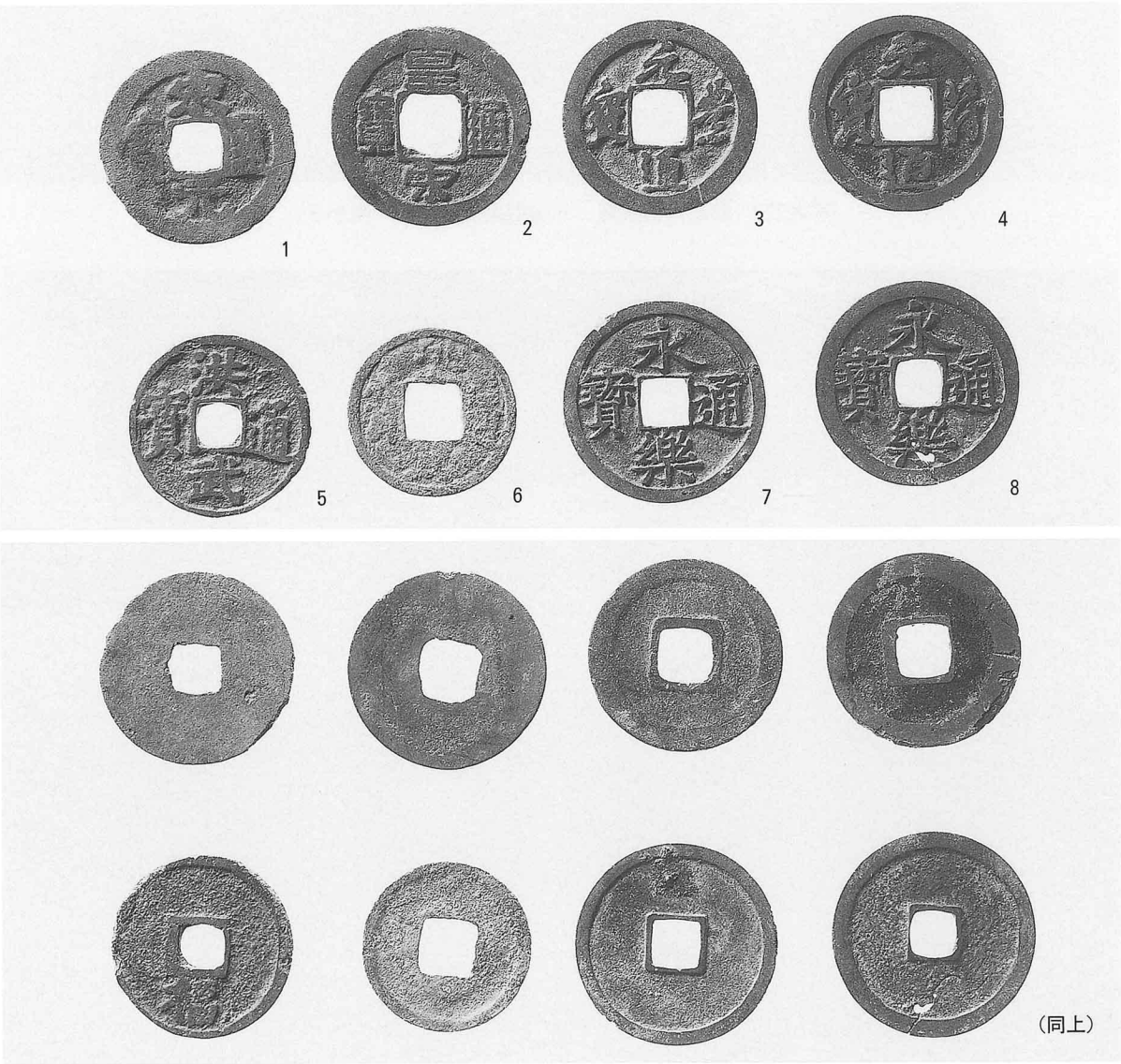


写真208　拝殿南調査区　６層出土銭貨（番号は第121図と対応）

写真209　拝殿南調査区　６層中礫出土状況（南から）

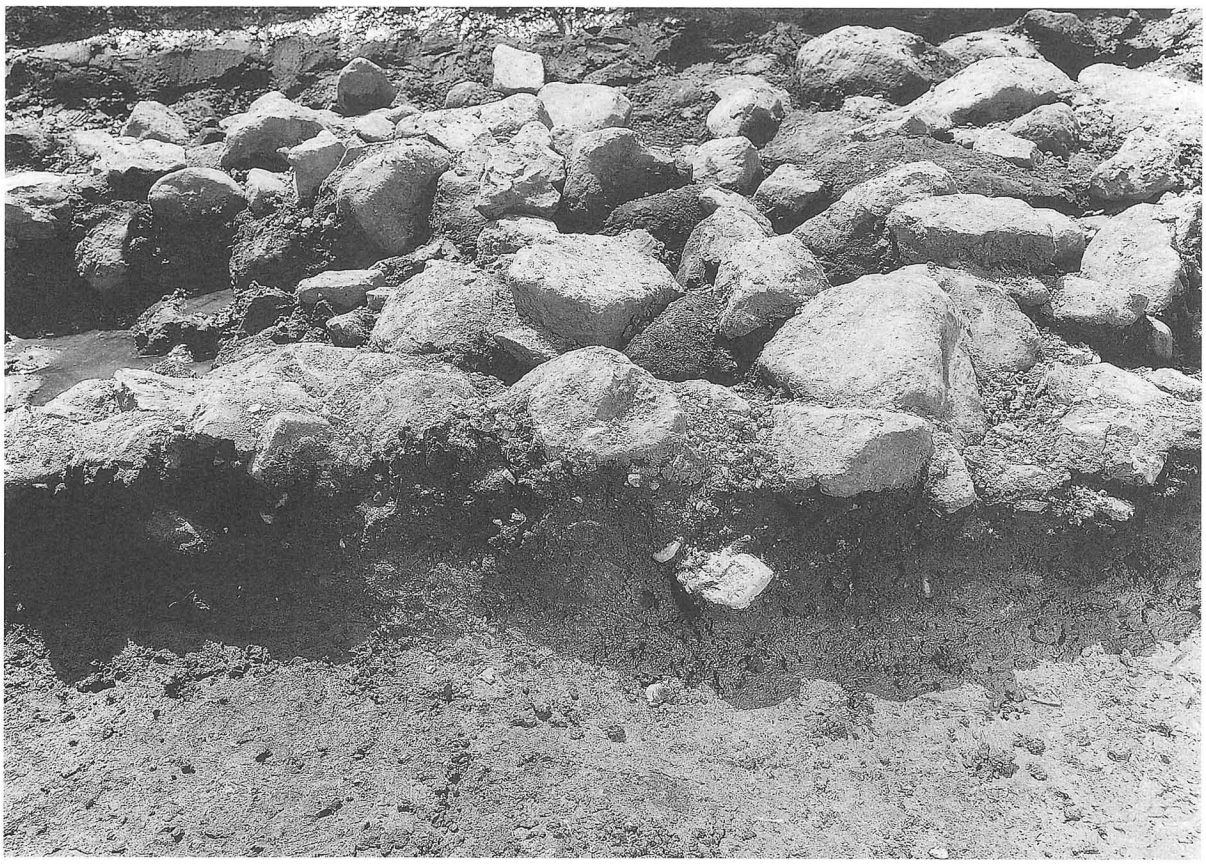


写真210　拝殿南調査区　６層中礫半裁状況（西から）

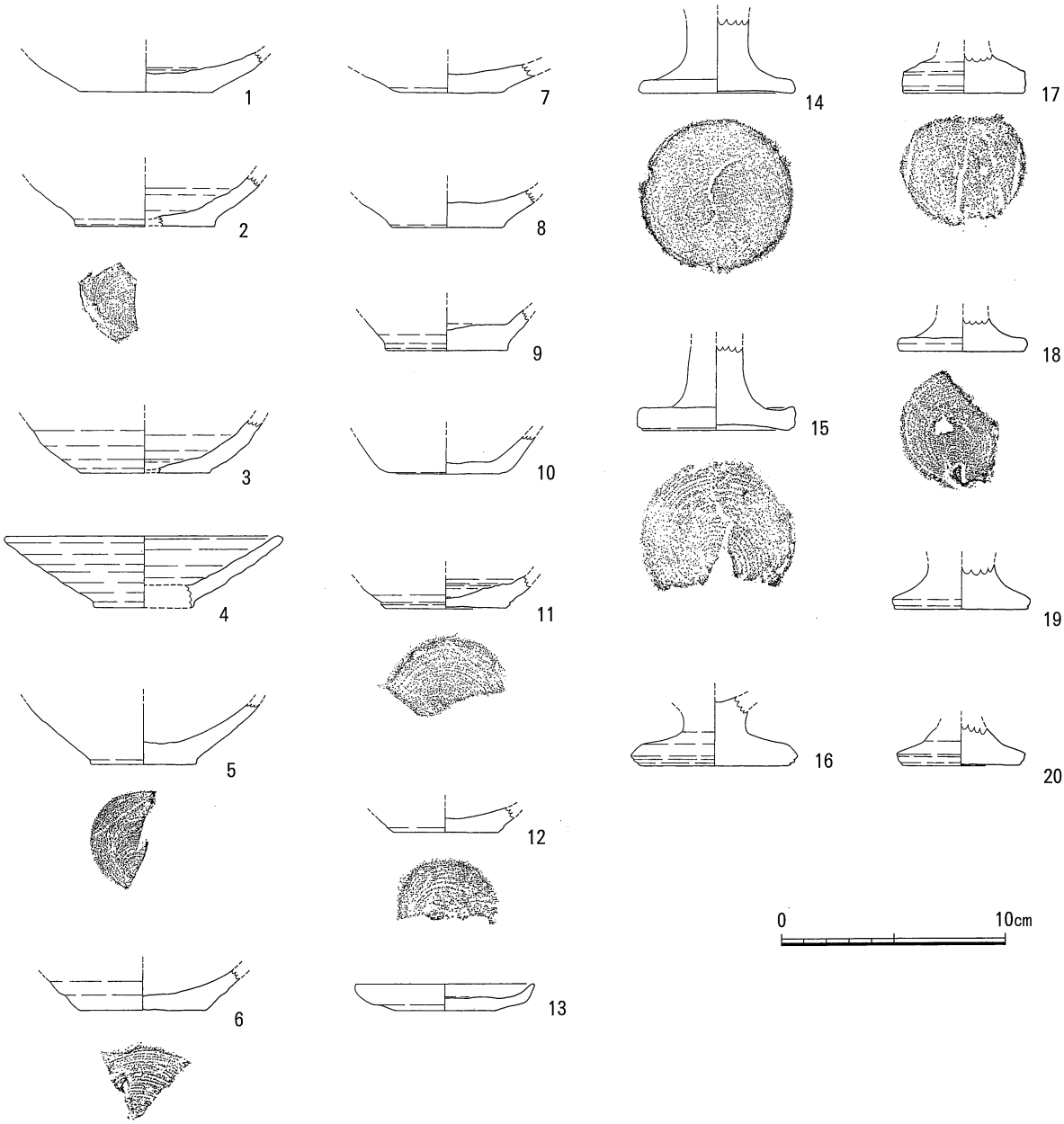
(7)　7層

7層は青灰色砂質土である。3層、5層と同様にしまりなく、洪水による堆積層と考えられる。

出土遺物（第123図・写真211・表54）

1～13は、土師質土器の皿である。13は、器高が1.1cmと他の土師質土器に比べ、極端に低い。14～20は、土師質土器の柱状高台付の坏である。底径から7cm前後と5cm前後に分けられる。

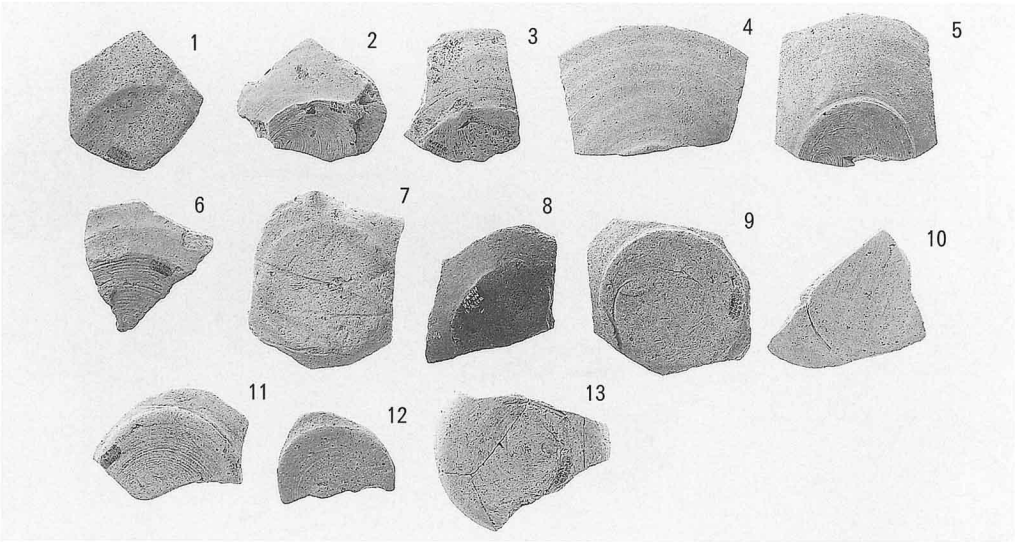
時期は、出土遺物からは不明である。



第123図　拝殿南調査区　7層出土遺物実測図（S＝1/3）

表54　拝殿南調査区　７層出土遺物（土器）観察表（番号は第123図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口　径（cm）	器　高（cm）	底　径（cm）	残存率	色　調	胎土	調整／形態／文様	備　考
1	7	土師質土器	皿	—	—	6	全体の30	橙色	密	—	磨耗が著しい
2	7	土師質土器	皿	—	—	6.2	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
3	7	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
4	7	土師質土器	皿	12.4	3.2	4.4	全体の30	淡橙色	密	内外面：回転ナデ	—
5	7	土師質土器	皿	—	—	4.6	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
6	7	土師質土器	皿	—	—	5.6	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
7	7	土師質土器	皿	—	—	4.4	全体の30	淡橙色	密	—	磨耗が著しい
8	7	土師質土器	皿	—	—	5	全体の30	灰黄褐色 外面褐変色	密	底部：回転糸切り	磨耗
9	7	土師質土器	皿	—	—	5.4	全体の30	灰黄色	密	底部：回転糸切りのちナデ 内外面：回転ナデ	—
10	7	土師質土器	皿	—	—	4.6	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り？ 内外面：ナデ	外面磨耗
11	7	土師質土器	皿	—	—	5.4	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ？	磨耗
12	7	土師質土器	皿	—	—	4.8	全体の30	橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗
13	7	土師質土器	皿	8	1.2	4.8	全体の50	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
14	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.6	底部のみ	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	—
15	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.4	底部の80	淡橙色	密	底部：回転糸切り	—
16	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.6	底部の30	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り？	—
17	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	底部の80	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	—
18	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	—
19	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6	底部の50	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り？ 底面中央に穿孔	—
20	7	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.2	底部の50	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗



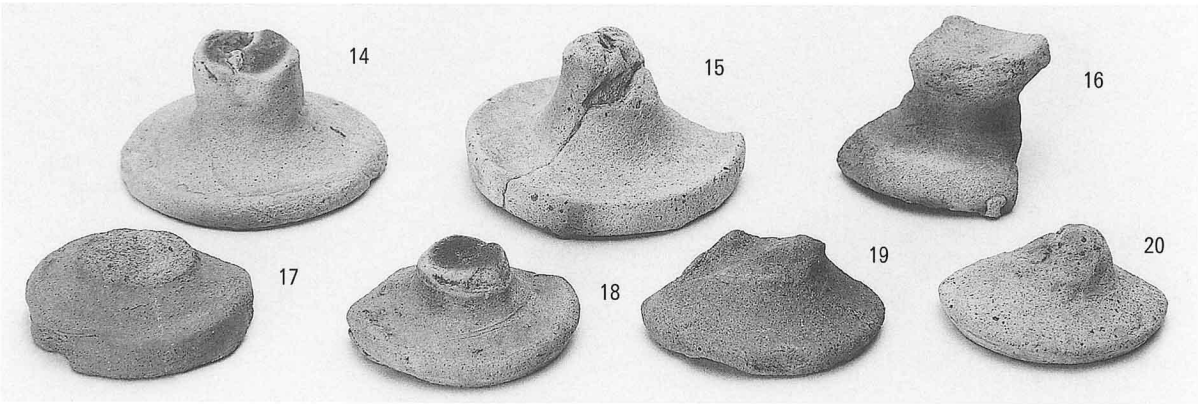


写真211　拝殿南調査区　７層出土土師質土器（番号は第123図と対応）

(8)　８層

８層上面は、ピット７基を検出しており、一定期間境内遺構面として機能した面である。

８層中出土遺物は、土師質土器が中心である。実測図を掲載した土師質土器のほかに土師質土器（皿）の破片が850点、柱状高台付坏（破片）が34点出土している。８層は、硬くしまっており、土器破片を多量に含んでいる。

出土遺物（第124～125図・写真212～213・表55～57）

１は、土師器壷の口縁部である。

２から33は土師質土器の皿、34～45は土師質土器の柱状高台付坏である。41は、坏部内面が丹塗りで、坏部内面に穿孔がみられる。42は、坏部と脚部の接合痕が残る。

46は、鉄製の釘である。

陶磁器としては、青磁碗破片が出土している。

８層の形成年代については、写真219－24が龍泉窯青磁碗であることから、13世紀前半以降に形成された可能性がある。

８層は、調査面積約20㎡と１層調査時と比較するとかなり狭小になっていたが、遺物出土量は、他の層よりも多い。（第130図）

表55　拝殿南調査区　８層出土遺物（土器）観察表①（番号は第124図と対応）

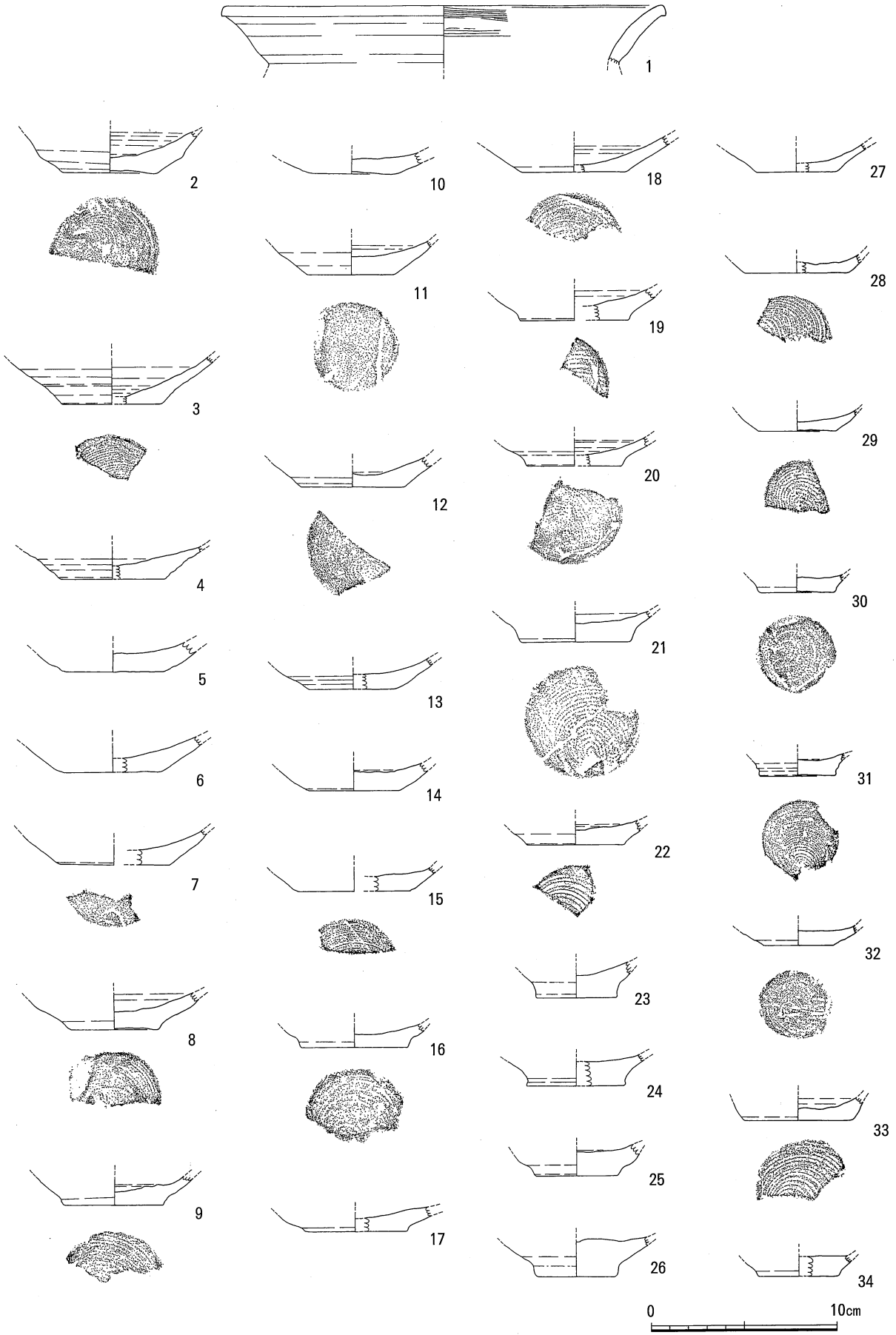
番号	層位	種　類	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
1	8	土師器	甕	23.8	—	—	口縁部小片	浅黄橙色	密	口縁部端部：面を持つ 口縁部内面：５条/１㎝の横ハケ、横ナデ 口縁部外面：横ナデ	—
2	8	土師質土器	皿	—	—	5	全体の50	淡橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
3	8	土師質土器	皿	—	—	5.4	全体の30	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り	—
4	8	土師質土器	皿	—	—	5.6	全体の30	にぶい橙色	密	内外面：回転ナデ	—
5	8	土師質土器	皿	—	—	5.4	全体の30	淡橙色	密	—	磨耗が著しい
6	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい
7	8	土師質土器	皿	—	—	6	全体の30	赤橙色	密	底部：回転糸切り	—
8	8	土師質土器	皿	—	—	4.8	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	磨耗が著しい
9	8	土師質土器	皿	—	—	5.4	底部の30	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	底部外面一部被熱
10	8	土師質土器	皿	—	—	4.6	全体の30	淡橙色	密	—	磨耗が著しい
11	8	土師質土器	皿	—	—	4.8	全体の30	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
12	8	土師質土器	皿	—	—	5.5	全体の30	橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
13	8	土師質土器	皿	—	—	4.6	全体の30	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい
14	8	土師質土器	皿	—	—	5	全体の50	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい
15	8	土師質土器	皿	—	—	6	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
16	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	底部の50	淡橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
17	8	土師質土器	皿	—	—	5.6	全体の30	淡橙色	密	—	磨耗が著しい
18	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
19	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	淡橙色	密	底部：判然とせず 内外面：回転ナデ	内外面にススが付着
20	8	土師質土器	皿	—	—	5.2	全体の30	にぶい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
21	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の50	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内面：不定方向の工具痕	—
22	8	土師質土器	皿	—	—	5.2	底部の50	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
23	8	土師質土器	皿	—	—	4.3	底部のみ	灰白色	密	—	磨耗が著しい
24	8	土師質土器	皿	—	—	5.3	全体の30	淡橙色	密	底部：静止糸切り？	磨耗が著しい

表56　拝殿南調査区　８層出土遺物（土器）観察表②（番号は第124・125図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
25	8	土師質土器	皿	—	—	4.4	全体の30	にぶい黄橙色	密	—	磨耗が著しい
26	8	土師質土器	皿	—	—	4.2	全体の50	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい
27	8	土師質土器	皿	—	—	4.4	全体の30	浅黄橙色	密	底部：判然とせず 内外面：回転ナデ	—
28	8	土師質土器	皿	—	—	5.6	底部の30	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り	—
29	8	土師質土器	皿	—	—	4.2	全体の30	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 外面：回転ナデ	—
30	8	土師質土器	皿	—	—	4.2	底部のみ	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	—
31	8	土師質土器	皿	—	—	4.1	底部のみ	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り 内面：回転ナデ	—
32	8	土師質土器	皿	—	—	3.8	底部のみ	淡橙色	密	底部：回転糸切り 内面：4㎜幅のヘラ状工具のあて具痕	—
33	8	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の30	灰褐色	密	底部：回転糸切り	—
34	8	土師質土器	皿	—	—	4.2	底部の50	にぶい黄橙色	密	—	磨耗が著しい
35	8	土師質土器	柱状高台付坏	7.6	—	—	全体の50	淡橙色	密	底部：回転糸切り	—
36	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	8.4	底部のみ	淡橙色	密	底部：回転糸切り	—
37	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	6.4	全体の30	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り？脚部の貼り付け痕が残る	—
38	8	土師質土器	柱状高台付坏	7.2	—	—	底部の30	淡橙色	やや粗、1㎜～3㎜の砂粒含む	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
39	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	全体の50	灰黄褐色	密	底部：回転糸切り 坏部内面：中央に穿孔	—
40	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.6	全体の50	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
41	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	底部の30	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り	—
42	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の50	(外)浅黄橙色 (内)黒褐色	密	底部：回転糸切り	—
43	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の50	浅黄橙色	密	底部：回転糸切り　坏部内面：赤彩、中央に穿孔	—
44	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の50	浅黄橙色	密	坏部と脚部の接合痕が残る。脚部外面：棒状工具の刺突痕、赤彩？	磨耗が著しい
45	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.6	全体の50	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい
46	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の30	にぶい橙色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい
47	8	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	4.8	全体の50	浅黄橙色	やや粗	—	磨耗が著しい

表57　拝殿南調査区　８層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第125図と対応）

番号	層位	種　類	長さ(cm)	頭部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　考
48	8	釘	6.2	頭部欠	0.6×0.5	6.64	60	炭化物付着



第124図　拝殿南調査区　８層出土遺物実測図(1)（S＝1/3）

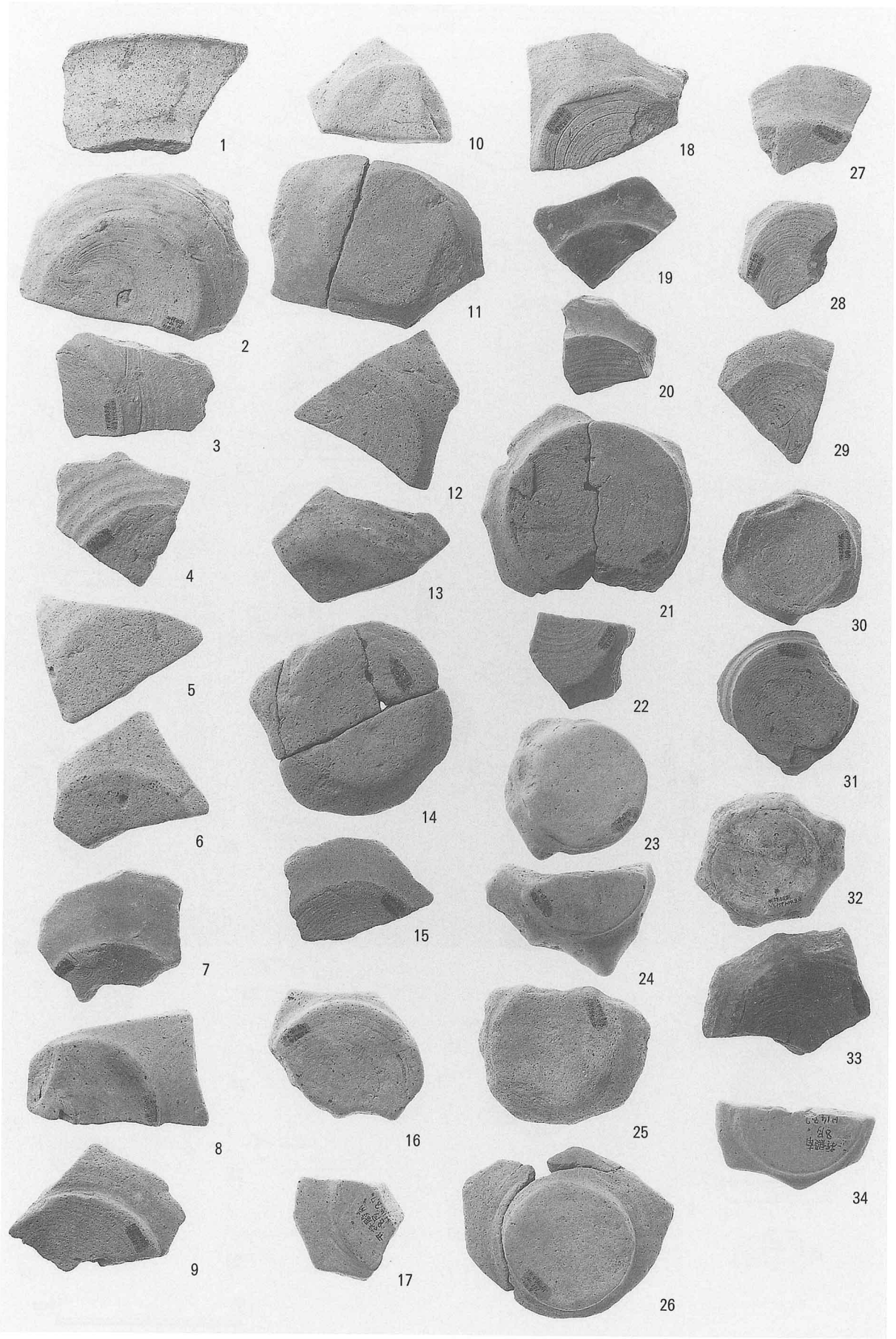
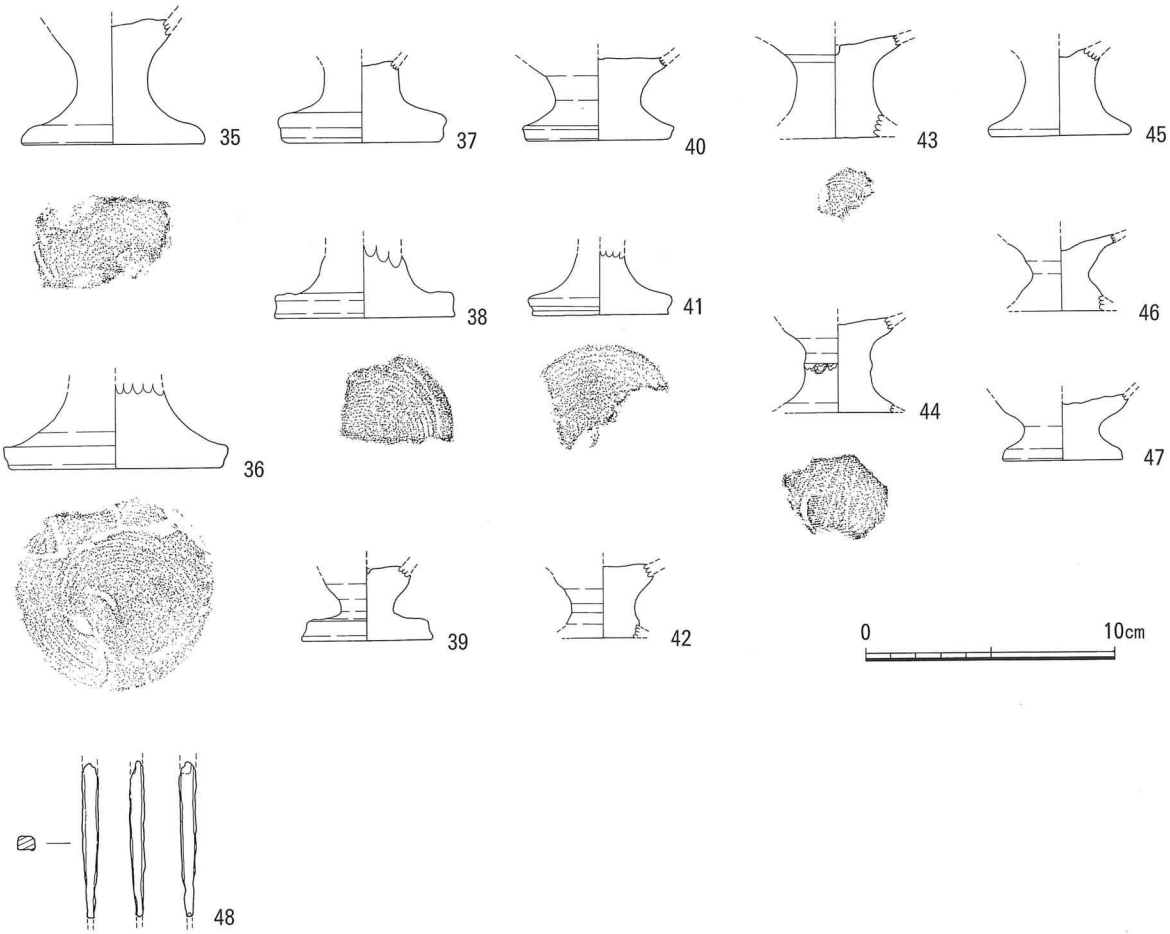


写真212　拝殿南調査区　８層出土土師質土器(1)（番号は第124図と対応）



第125図　拝殿南調査区　８層出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

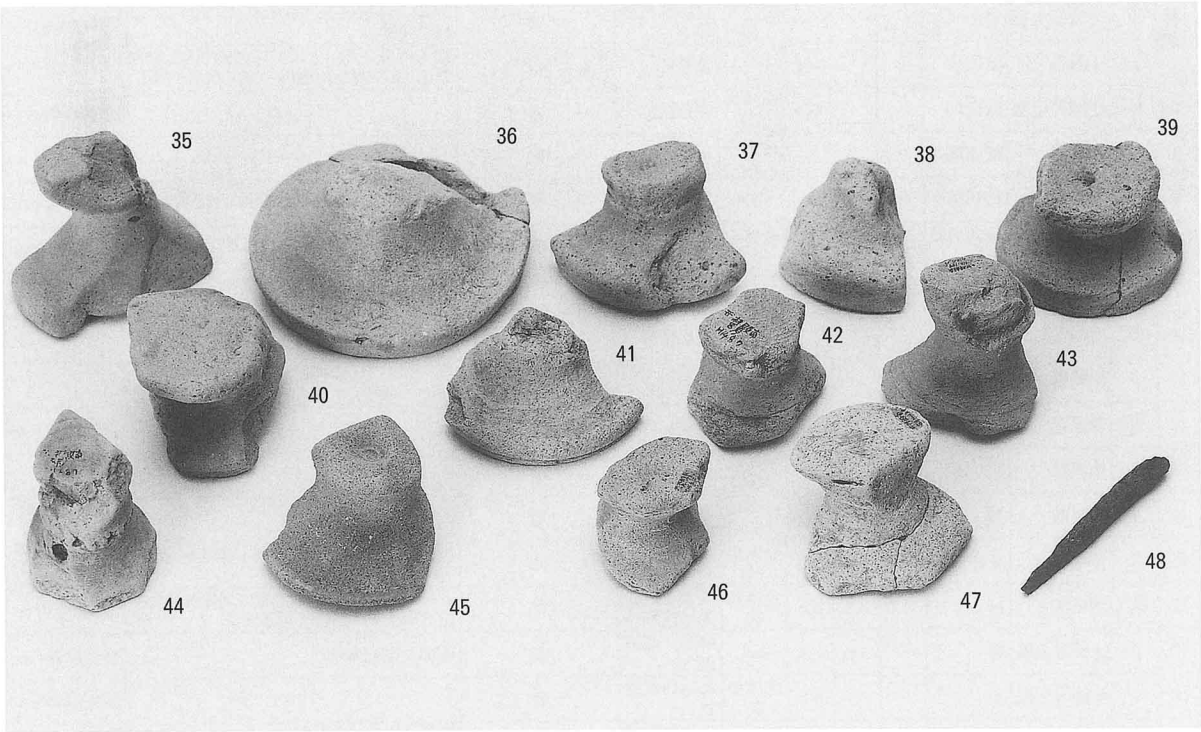


写真213　拝殿南調査区　８層出土土師質土器(2)・鉄製品（番号は第125図と対応）

(9)　9層

9層上面では、ピット7基を検出しており、一定期間境内遺構面として機能した面である。

出土遺物（第126図・写真214～216・表58～59）

1、2は、単純口縁の土師器甕である。いずれも体部内面にヘラケズリが施されている。（草田6期？）

3～7は、低脚坏の脚部である。

8は、土師質土器の柱状高台付坏である。坏部内面に穿孔がみられる。

9は、土師器高坏の脚部である。

10・11は、飛田恵美子氏の分類8類（棒状脚。台脚は、その名残をとどめる程度）に分類されよう。時期は10・11とも6世紀後半代の年代が与えられる。

12～14は、須恵器のは瑕である。3点とも底経6㎝程度であるが、2・3には、底面回転糸切り痕が明確に残るが、1は摩滅したのであろうか、回転糸切り痕はみられない。いずれも、体部のみ残存しており、頸部は、不明瞭である。

年代は、底部を糸切りのまま放置し、底面が凹面になるなど、出雲国庁編年の第4形式に該当すると考えられる。8世紀後葉以降の年代が与えられる。

15は、高台坏の須恵器の坏、16は、高台のない須恵器の坏である。15・16とも底部は回転糸切りであり、高広編年のⅣA期（8Cの中～後）と考えられる。

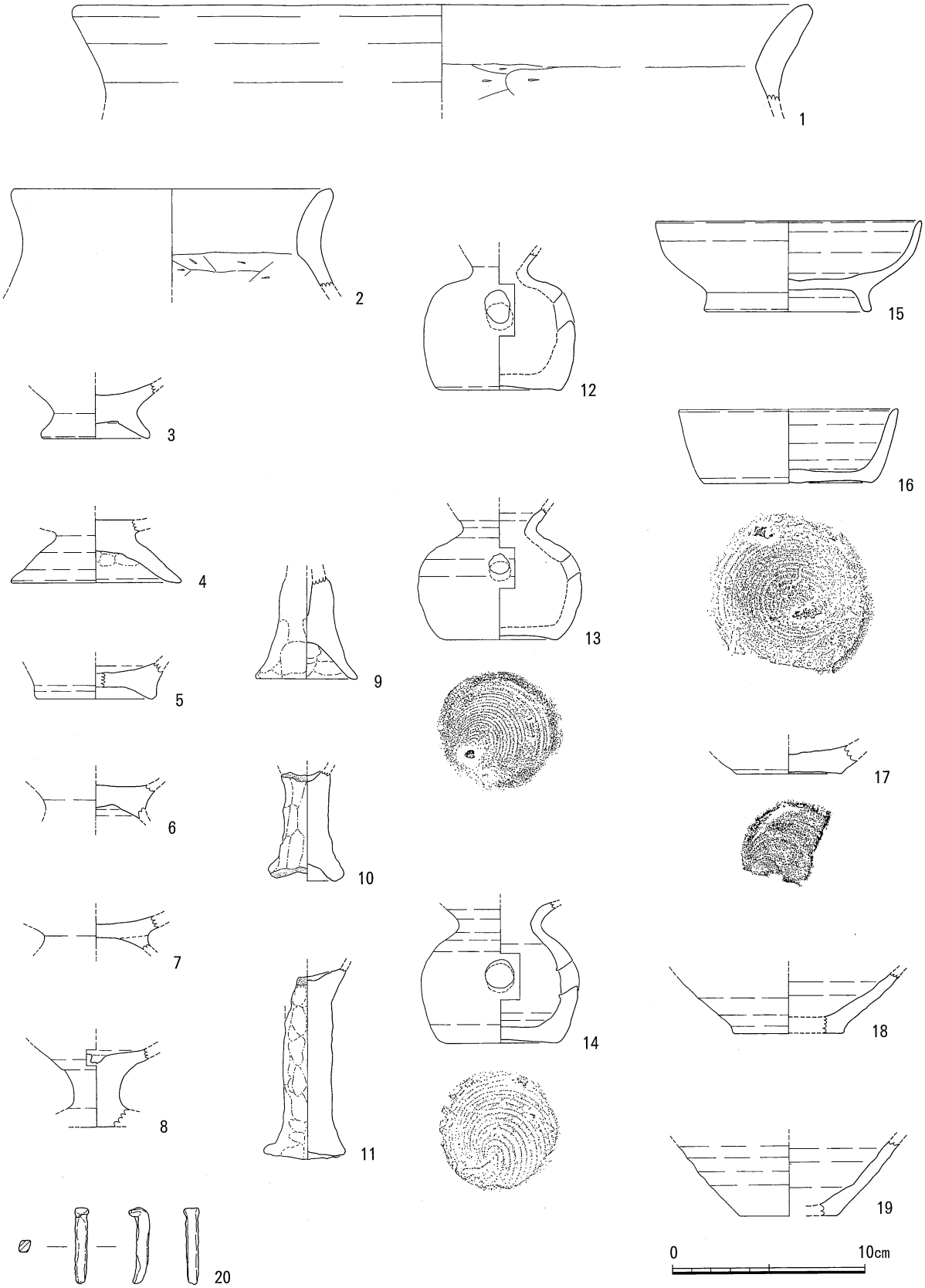
17～19は、土師質土器ので、17は皿、18・19は、坏である。

20は、長さ4㎝ほどの角釘である。

9層の形成時期は、土師質土器の出土から中世前半代と考えられる。

表58　拝殿南調査区　9層出土遺物（土器）観察表（番号は第126図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	残存率	色調	胎土	調整／形態／文様	備考
1	9	土師器	甕	38.4	—	—	口縁部小片	にぶい黄橙色	密	単純口縁：短く上方に外傾　口縁端部：面をもたない　口縁部内外面：横ナデ 内面：横位のヘラケズリ	—
2	9	土師器	甕	16.4	—	—	口縁部小片	にぶい黄橙色	密	単純口縁：短く上方に外傾　口縁端部：面をもたない　口縁部内外面：横ナデ 内面：横位のヘラケズリ	—
3	9	土師質土器	低脚坏	—	—	5.6	全体の40	にぶい黄橙色	密	脚部：坏底部を回転糸切りしてから脚貼付け、回転ナデ?	磨耗が著しい
4	9	土師器	低脚坏	—	—	8.8	—	黄橙色	密、3㎜程度の砂粒を多量に含む	脚部内面：指オサエ　坏部内外面、脚部外面、及び脚部内面の一部に赤彩が残る	磨耗が著しい
5	9	土師質土器	低脚坏	—	—	6.1	全体の30	浅黄橙色	密	—	磨耗が著しい
6	9	土師器	低脚坏	—	—	—	全体の20	橙色	密	—	磨耗が著しい
7	9	土師器	低脚坏？	—	—	—	小片	にぶい黄橙色	密	—	磨耗が著しい
8	9	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の65	にぶい黄橙色	密	坏部内面：中央に穿孔 内外面：回転ナデ？	—
9	9	土師器	高坏	—	—	5.2	脚部の80	にぶい黄橙色	密、1㎜程度の砂粒を多量に含む	手づくね　脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
10	9	土師器	製塩土器	—	—	3.9	—	浅黄橙色	密	手づくね　脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
11	9	土師器	製塩土器	—	—	4.1	—	黄橙色一部黒色	密、1㎜程度の砂粒を多量に含む	手づくね　脚部外面：指頭圧痕 底面：調整なし	—
12	9	須恵器	瑕	—	—	6.6	全体の90	明灰褐色	密、1㎜～3㎜の砂粒含む	底部：平底	磨耗が著しい
13	9	須恵器	瑕	—	—	6.2	全体の90	灰褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—
14	9	須恵器	瑕	—	—	6.2	全体の60	茶褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	生焼けの須恵器
15	9	須恵器	高台付坏	13.8	4.7	8.5	全体の50	灰褐色	密	高台：貼付け　高台端部：面をもつ　内外面：回転ナデ	—
16	9	須恵器	坏	11.4	3.8	8.6	全体の80	灰色、口縁部付近黒色	密	底部：回転糸切り　内面：回転ナデ、一定方向ナデ　外面：回転ナデ	—
17	9	土師質土器	皿	—	—	5.4	小片	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
18	9	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の20	にぶい黄橙色	密	—	磨耗が著しい
19	9	土師質土器	皿	—	—	5.2	小片	にぶい黄橙色	密	底部：回転糸切り？ 内外面：横ナデ　外面：赤彩	—



第126図　拝殿南調査区　９層出土遺物実測図（S＝1/3）

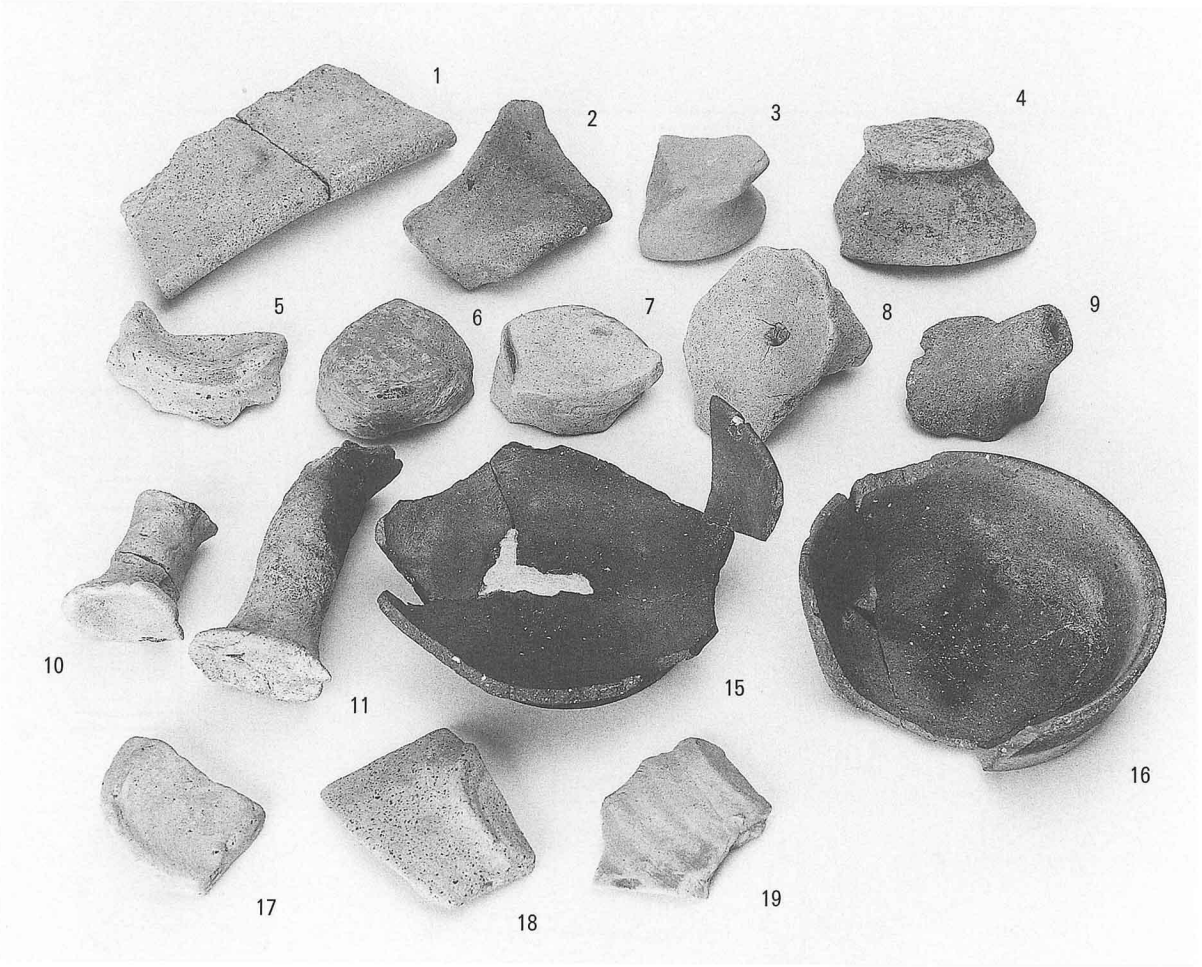


写真214　拝殿南調査区　９層出土遺物（番号は第126図と対応）

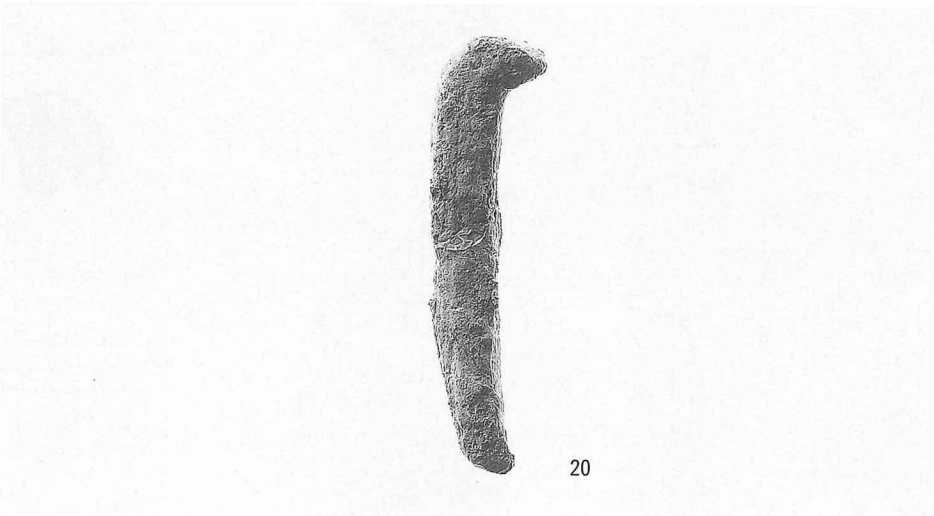


写真215　拝殿南調査区　９層出土鉄製品（番号は第126図と対応）

表59　拝殿南調査区　９層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第126図と対応）

番号	層位	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備　　考
20	9	釘	3.9	頭部幅 0.6×0.7	0.5×0.5	2.75	90	打面：方形 頭部形態：端部圧延、折り曲げ、胴部との境にくびれなし

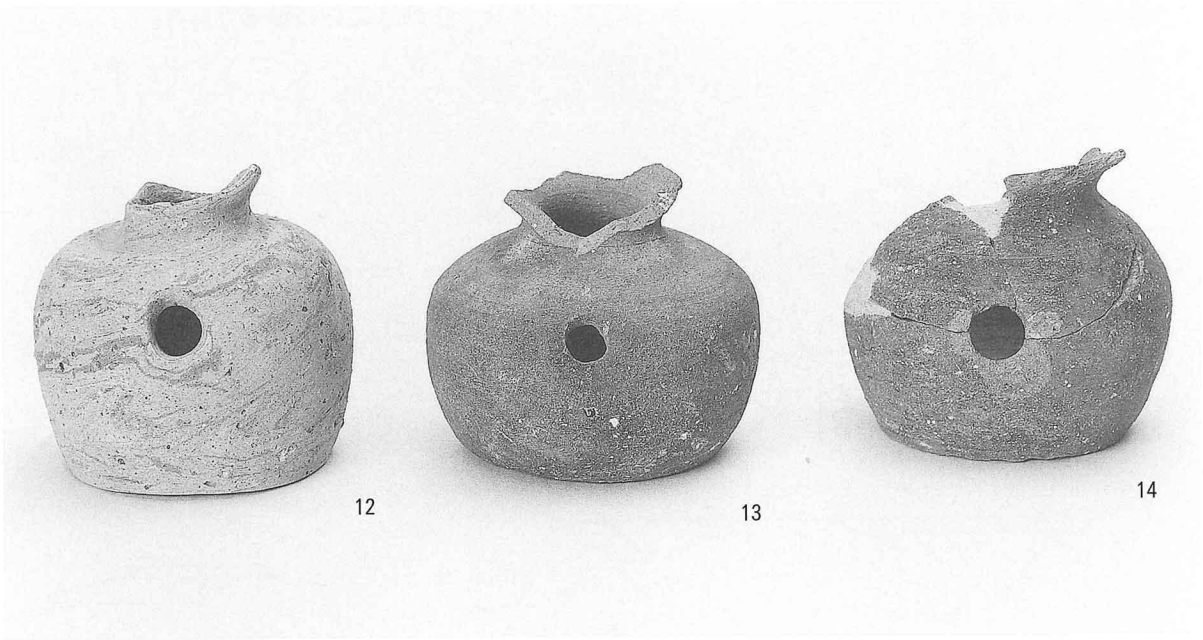


写真216　拝殿南調査区　９層出土須恵器（瑳）（番号は第126図と対応）

⑽　10層

10層上面においては、炭化物が面的に広がりを持つことから、一定期間境内遺構面として機能したと考えられる。

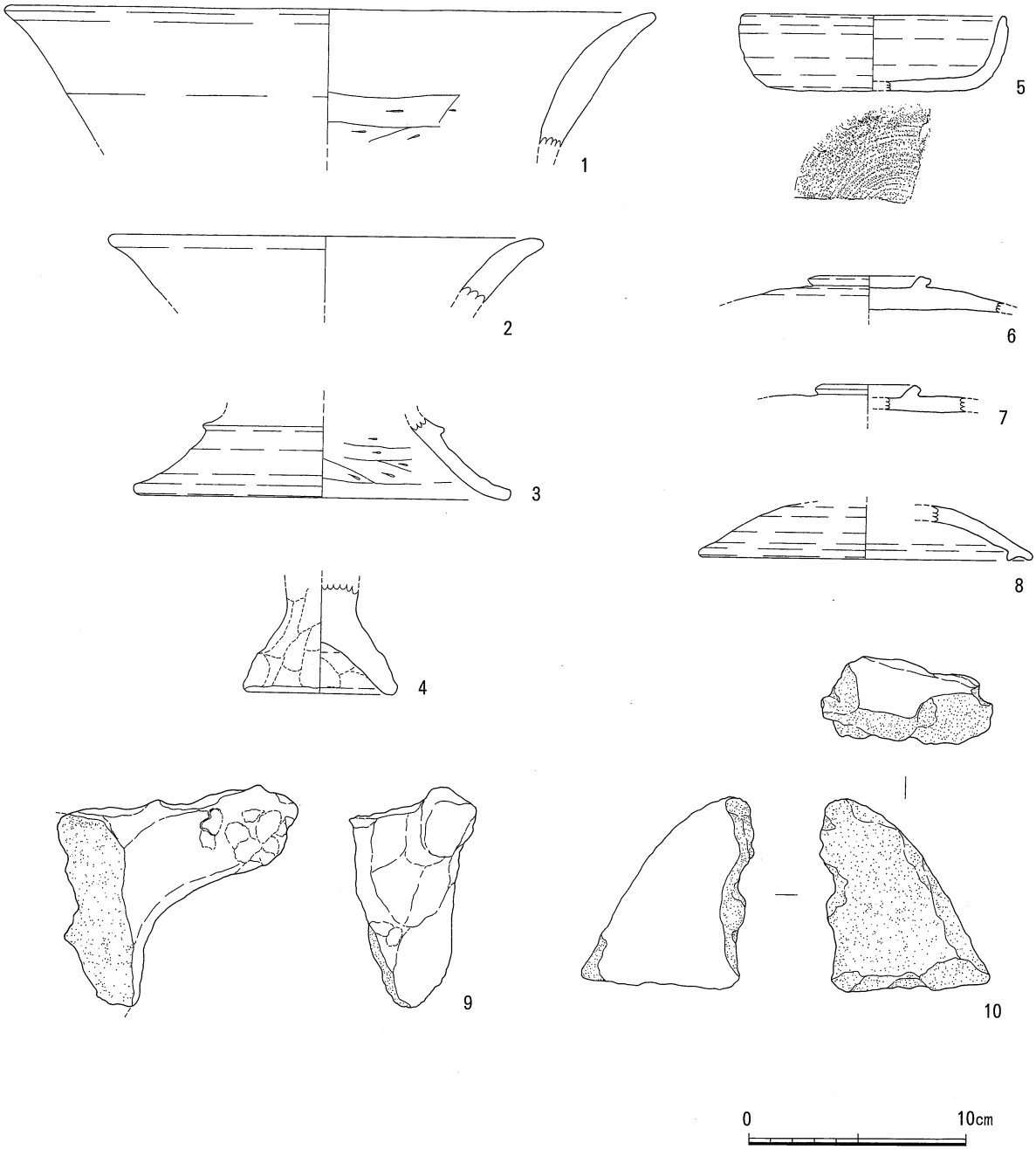
上面で遺構は検出されなかった。

出土遺物（第127図・写真217・表60～61）

1・2は、単純口縁の土師器甕である。

3は、土師器の鼓形器台の下台部分である。草田6期に該当する。

4は、土師器高坏の脚部である。



第127図　拝殿南調査区　10層出土遺物実測図（S＝1/3）

５は、須恵器の坏である。底部回転糸切りであり、高広編年のⅣA期（８中～後）であろう。

６～８は、須恵器の坏蓋である。６・７は、輪状つまみであり、また、８は、口縁部にかえりがあり、高広編年Ⅲ期（７中～８前）に該当しよう。

９・10は、土製支脚である。

10層の形成時期は、出土遺物が須恵器・土師器が出土するものの、９層中にまで出土していた土師質土器・陶磁器が１点も出土しないことから８世紀前半～11世紀頃に堆積したと考えられる。

表60　拝殿南調査区　10層出土遺物（土器）観察表（番号は第127図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	残存率	色　調	胎土	調整／形態／文様	備　考
1	10	土師器	甕	口縁部小片	にぶい黄橙色	密	口縁部外面：横ハケ、一部に赤彩が残る 口縁部内面：横ハケ、横位のヘラ削り	被熱により黒色を呈している
2	10	土師器	甕	口縁部小片	にぶい黄橙色	密	内外面：横ナデ	—
3	10	土師器	鼓型器台	小片	明赤褐色	密	内面：ヘラ削り、横ナデ 外面：横ナデ	—
4	10	土師器	高坏	脚部の70	にぶい黄橙色	粗　１㎜の砂粒を多く含む	手づくね 脚部内面：ナデ 脚部外面：上半縦方向斜に強くナデつけ、下半：横ナデ、指オサエ	—
5	10	須恵器	坏身	全体の30	褐灰色	密	口縁部：内湾して立ち上がり、端部をわずかに外側に折る 底部：回転糸切り 内面：回転ナデ、一定方向ナデ、不定方向ナデ 外面：強い横ナデによる凹凸	—
6	10	須恵器	坏蓋	全体の30	褐灰色	密	輪状つまみ：面をもつ、貼付け、回転ナデ 天井部：回転ヘラ削り、ナデ 内面：ナデ	—
7	10	須恵器	坏蓋	小片	灰色	密	輪状つまみ：面をもたない、貼付け、回転ナデ 天井部：回転ヘラ削り、ナデ 内面：回転ナデ、一定方向ナデ	—
8	10	須恵器	坏蓋	口縁部小片	褐灰色	密	口縁部：端部内側の突帯内傾、回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ヘラ削り、回転ナデ	—

表61　拝殿南調査区　10層出土遺物（土製品）観察表（番号は第127図と対応）

番号	層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎　土	色　調	備　考
9	10	土製支脚	—	—	—	密	浅黄橙色	—
10	10	土製支脚	—	—	—	やや粗くぼろぼろ欠落する	浅黄橙色	—

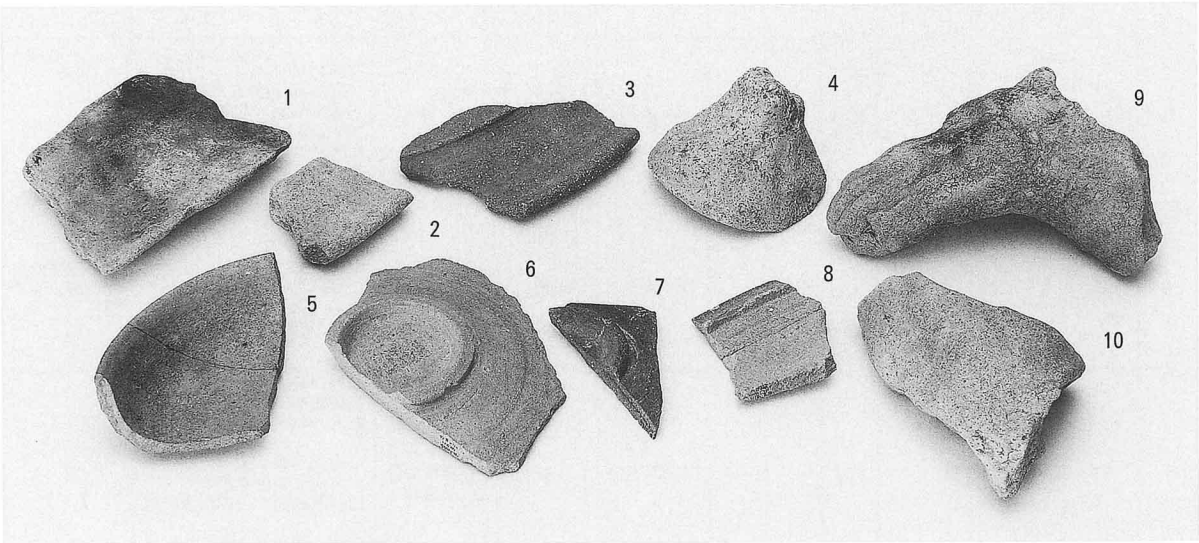


写真217　拝殿南調査区　10層出土遺物（番号は第127図と対応）

⑾　11層

11層は、黒褐色土層であり、土師器・須恵器を多量に包含している。

出土遺物（第128～129図・写真218・表62～65）

１～５は、弥生土器甕の口縁部である。１は、口縁部に斜格子文が残る。１、２が松本編年Ⅰ－４、３～５は、松本編年Ⅴ－１（弥生時代後期初頭・草田１期）である。

６～14は、複合口縁の土師器甕である。６～10は、口縁端部の形状から、草田編年の草田７期、小谷２式に該当する。

11・12は、単純口縁で、全体的に器壁が厚く、松山編年の大東式か。

13・14は、「く」の字状の口縁部をもつもので、14は、外面体部にタテハケが施されている。古墳後期のものであろう。

15～19は土師器の高坏である。19は、放射状に暗文を施した赤彩高坏である。脚部外面を丁寧に磨く点から、花谷分類高坏D－１（小谷式）であろうか。

20～22は、土師器の低脚坏である。

23・24は須恵器の坏蓋である。23は、口縁部にかえりをもち、高広編年Ⅲ期、24は輪状つまみをもち、口縁部にかえりをもたないことから、高広編年ⅢB期（７末～８前）に該当しよう。

25は、須恵器の高台付坏である。底部回転糸切りであり、高広編年ⅢB期に該当しよう。

26・27は、かまどの脚部である。

表62　拝殿南調査区　11層出土遺物（土器）観察表①（番号は第128図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
1	11	弥生土器	甕	19.4	—	—	口縁部小片	にぶい黄橙色	やや粗、1～3㎜程度の砂粒を多量に含む	単純口縁 口縁端部：面をもち、格子目文を施す	磨耗が著しい
2	11	弥生土器	甕	13	—	—	小片	灰黄褐色	密、1㎜程度の砂粒を含む	単純口縁：短く外傾する 口縁端部：面をもたない 口縁部内面：５条／1cmの横位のハケ目 口縁部外面：横ナデ 内面：横位のヘラケズリ 外面：横ナデ	口縁の一部にススが付着
3	11	弥生土器	甕	18	—	—	口縁部小片	灰黄褐色（外側一部にぶい黄橙色）	密、1～3㎜程度の砂粒を含む	二重口縁 口縁端部：面をもたない 口縁部外面：３条の沈線 口縁部内面：横ナデ 頸部外面：ヘラ状工具による刺突列点文 内面：横ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	—
4	11	弥生土器	甕	18.2	—	—	口縁部小片	にぶい黄橙色	密	二重口縁 口縁端部:面をもたない 口縁部外面：２条＋３条の沈線、横ナデ 口縁内面：横ナデ、ススで黒変色	—
5	11	弥生土器	甕	16	—	—	口縁部小片	灰黄褐色	密	二重口縁 口縁端部：面をもたない 口縁部外面：２条＋５条の沈線、横ナデ 口縁部内面:横ナデ	３cm程度の小片の為口径不明
6	11	土師器	甕	19.2	—	—	口縁部小片	にぶい橙色	密、1～2㎜程度の砂粒を含む	複合口縁 口縁端部：丸みを持った面をもつ、わずかに外側に肥厚 口縁部外面：鋭角の稜が水平方向に突出する 口縁部内面：一部に赤彩残る 内面：横ナデ、横位のヘラケズリ	—

表63　拝殿南調査区　11層出土遺物（土器）観察表②（番号は第128・129図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
7	11	土師器	甕	15.6	—	—	口縁部小片	灰褐色～にぶい赤褐色	密、1㎜程度の砂粒を多量に含む	複合口縁 口縁端部：面をもち、外側に肥厚 口縁部外面：鋭角の稜をもつ、横ナデ 外面：横ナデ 内面：横ナデ、横位のヘラケズリ	—
8	11	土師器	甕	15.4	—	—	全体の30	にぶい黄橙色	密、1～3㎜の砂粒含む	複合口縁 口縁端部：面をもたない、外側に肥厚 口縁部外面：稜は斜め下方向に突出する 内面：横位のヘラケズリ 外面：縦ハケ、横ハケ	—
9	11	土師器	甕	—	—	—	小片	にぶい黄橙色	密	内面：横位のヘラケズリ、一部に縦位のヘラケズリ、頸部付近に棒状工具の先端による連続したオサエ 外面：19条／1㎝の横ハケ、19条／1㎝の斜位のハケ目	—
10	11	土師器	甕	13.5	—	—	小片	にぶい黄橙色	密	複合口縁 口縁端部：面を持つ 口縁部外面：稜は水平方向に突出する 外面：6条／1㎝の横ハケ 内面：横位のヘラケズリ	—
11	11	土師器	甕	15	—	—	—	にぶい黄橙色	密	単純口縁：内湾気味に外傾する 口縁端部：面をもち外側に玉縁状に肥厚 口縁部内外面：横ナデ 内面：横ナデ 外面：横ナデ、縦ハケ	—
12	11	土師器	甕	13.8	—	—	口縁部小片	にぶい黄橙色	密、1～3㎜の砂粒を含む	単純口縁：直線的に外傾する 口縁端部：丸みをもち内側に肥厚 口縁部内面：横ナデ 口縁部外面：横ハケ、複合口縁の名残の稜痕跡が残る 内面：横位のヘラケズリ 外面：判然とせず	口縁の一部にスス付着
13	11	土師器	甕	16.8	—	—	口縁部の20	にぶい黄橙色、一部赤褐色	密	単純口縁 ：直線的に上方に外傾する 口縁端部：1条のごく浅い沈線 内面：横ナデ、横位のヘラケズリ 外面：横ナデ	—
14	11	土師器	甕	26	—	—	口縁部の30	にぶい黄橙色	密	単純口縁：直線的に外傾 口縁端部：面をもたない 口縁部内面：10条／1㎝の横ハケ 口縁部外面：横ナデ、ナデ 内面：横位のヘラケズリ 外面：ナデ、10条／1㎝の縦ハケ	—
15	11	土師器	高坏	17.2	11.9	8.6	全体の50	明茶褐色	密	有段の坏部をもち、脚部は接合部で一度くびれ、途中で大きく屈折し外側にひらく 坏部外面：上半部は外傾し端部外側に折れる。下半部に放射線状の櫛目 坏部内面：一部に横位の櫛目 脚部外面：縦位のヘラミガキ 脚部内面：ヘラケズリ	—
16	11	土師器	高坏	—	—	—	坏部の25	にぶい橙色	密	坏部外面：段を有す。上半部に5条／1㎝の横位の櫛目、下半部に脚接合部を中心とした放射線状の櫛目	—

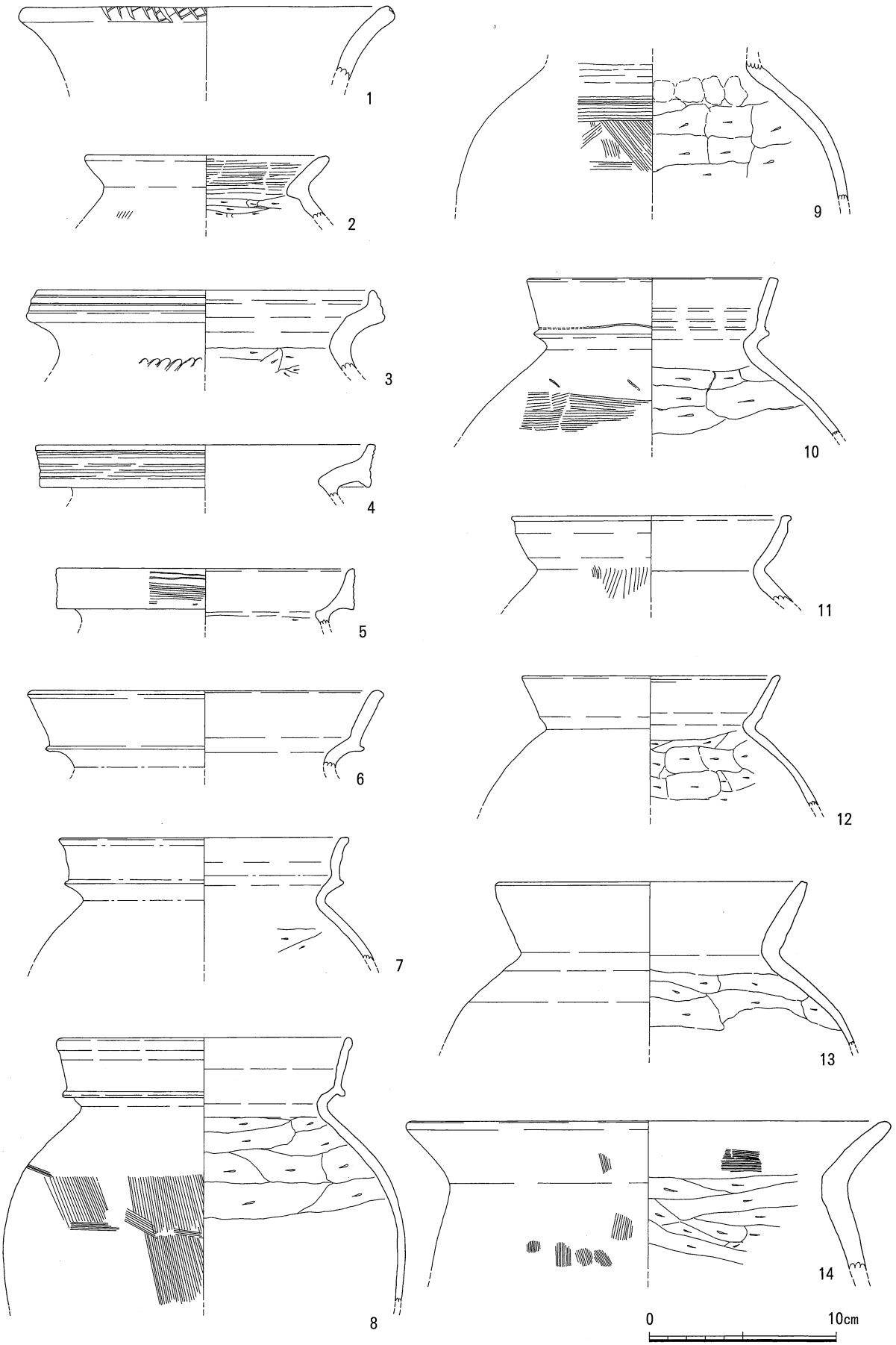
表64　拝殿南調査区　11層出土遺物（土器）観察表③（番号は第129図と対応）

番号	層位	種　類	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色　調	胎　土	調整／形態／文様	備　考
17	11	土師器	高坏	—	—	—	坏部小片	—	密	脚部内側から粘土充填、脚貼付け、坏部の内外両面に赤彩残る 坏部外面：脚接合部を中心とした放射線状の櫛目 脚部外面：縦位のヘラミガキ	—
18	11	土師器	高坏	—	—	—	脚部の80	橙色	密	脚部三方向に円孔 脚部内面：横位のヘラケズリ 脚部外面：横ハケ、上半部に縦位の櫛目	—
19	11	土師器	高坏	—	—	12.4	脚部の80	にぶい橙色	密	脚部途中で大きく屈折し外側にひらく 脚部内面：絞り目 脚部外面：縦位のヘラミガキ	—
20	11	土師器	低脚坏	—	—	6	全体の60	にぶい黄橙色	密	脚貼付け 脚部内外面：横ナデ 坏部内面：判然とせず	—
21	11	土師器	低脚坏	—	—	6.4	脚部のみ	(外)にぶい黄橙色(内)褐灰色	粗、1㎜程度の砂粒を多量に含む	脚貼付け 脚部内外面：横ナデ 坏部内面：判然とせず	—
22	11	土師器	低脚坏	—	—	5	脚部の50	にぶい黄橙色～にぶい橙色	密、1㎜～3㎜程度の砂粒を含む	脚部内側から粘土を充填、脚貼付け 脚部内外面：横ナデ	—
23	11	須恵器	坏蓋	—	—	—	口縁部小片	褐灰色	密	口縁部：端部内側の突帯わずかに内傾、回転ナデ 天井部：回転ヘラケズリのち回転ナデ 内面：回転横ナデ	—
24	11	須恵器	坏蓋	14.6	2.5	—	全体の40	灰褐色	密	つまみ：退化した輪状つまみ 口縁部：下方にわずかにつまみ出す、回転ナデ 天井部：押さえ込まれてふくらみをもたない／回転ナデ 内面：回転ナデのち不定方向ナデ	—
25	11	須恵器	高台付坏	—	—	8.6	底部の50	灰褐色	密	高台：貼付け 高台端部：ほとんど面をもたず丸みを帯びる、厚み不均一、水平ラインゆがむ 高台内部：回転ナデ 坏部内面：回転ナデヵ 坏部外面：回転ナデ	—

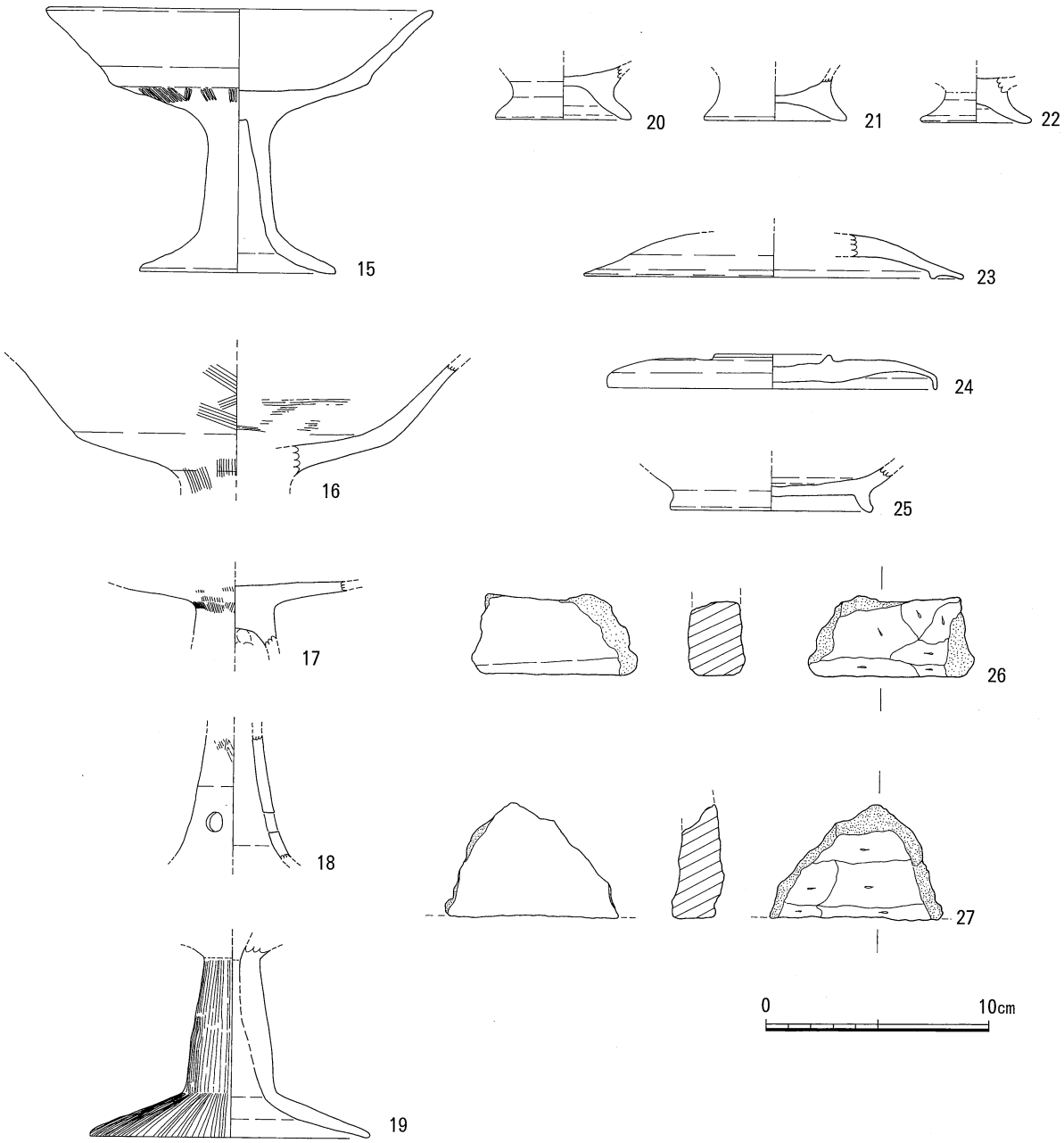
表65　拝殿南調査区　11層出土遺物（土製品）観察表（番号は第129図と対応）

番号	層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎　土	色　調	調整／形態／文様	備　考
26	11	カマド	7.8	5.1	2	密	にぶい黄橙色	内面ヘラケズリ	—
27	11	カマド	7.5	3.6	2.5	密	灰褐色(一部にぶい橙色)	内面ヘラケズリ	—

なお、14および23～27の遺物については、調査時に11層出土遺物として取り上げたが、11層を切って形成されたＳＤ０２の機能した時期が、７世紀後半から８世紀前半と考えられ、これらの遺物が、他の出土遺物よりも圧倒的に少ないことを考えても、ＳＤ０２埋土中のものを混合して取り上げた可能性がある。



第128図　拝殿南調査区　11層出土遺物実測図(1)（S＝1/3）



第129図　拝殿南調査区　11層出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

⑿　12層

12層上面において遺構は確認されなかった。また、12層上面検出後、さらに１m程度掘り下げているが、遺物は全く出土しないことから、遺物を包含する層は、11層中までと考えられる。

⒀　出土遺物について

宝治度本殿遺構と同一の面と考えられる８層上面であるが、調査面積約20㎡であるが、本調査区内の層位においては、最大の出土量である。（第130図）出土遺物としては、土師質土器が最も割合が大きい。なかでも柱状高台付坏は、全出土量の50パーセント以上の46点である。宝治度本殿遺構周辺においても柱状高台付坏が集中して出土しており、中世段階での最も活発な活動をした遺構面であろう。

土師質土器は、８層まで比較的多く出土しているが、９層から須恵器・土師器が増加してく

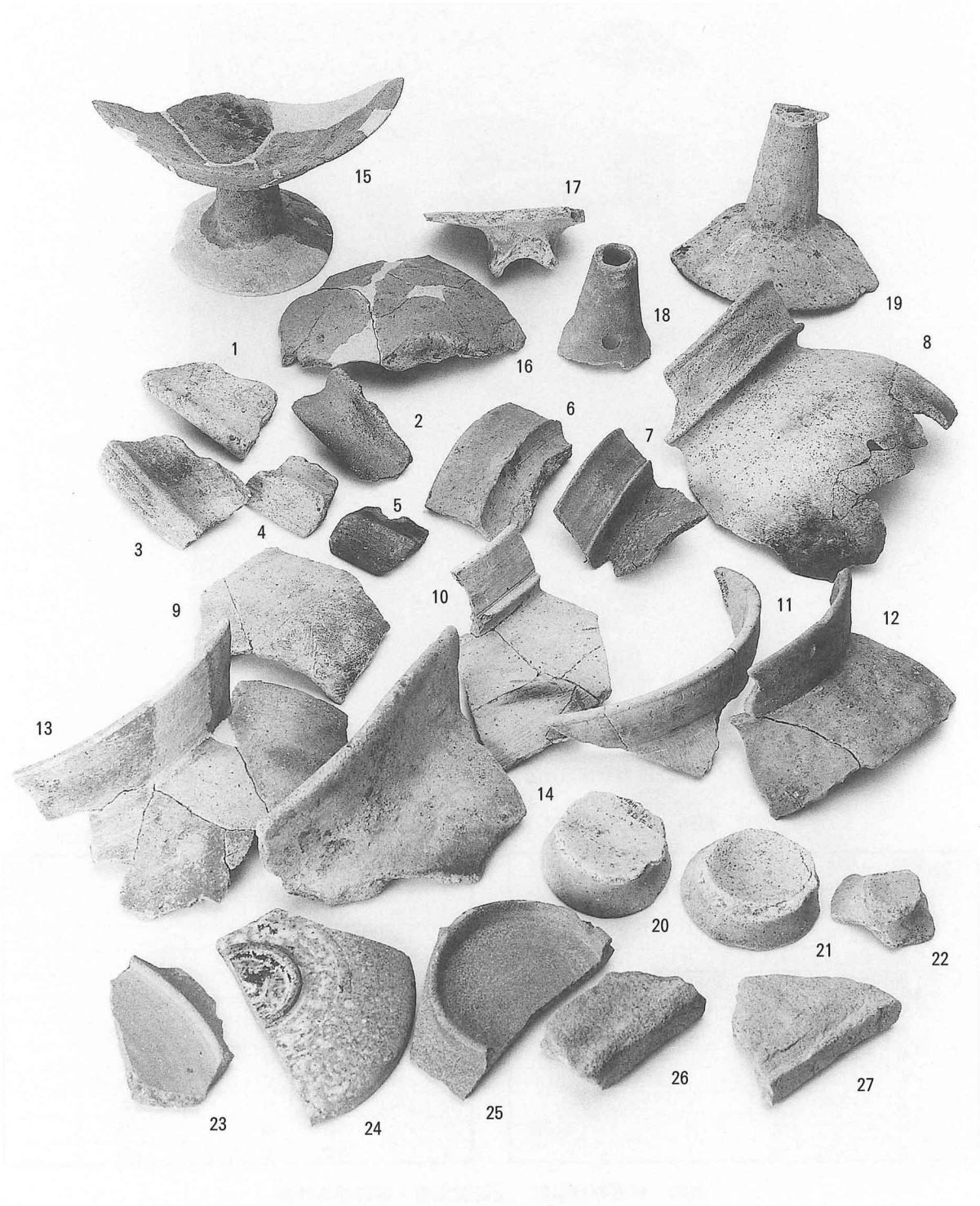


写真218　拝殿南調査区　11層出土遺物（番号は第128～129図と対応）

る。土師器は、９層から急激に増加し、11層で全出土量の50パーセント以上が出土する傾向が窺え、平成11年度調査時の古墳時代前期遺構面出土の土師器とあわせて考えても、境内中央部には、古墳時代前期の人々の活発な活動があったことが窺える。

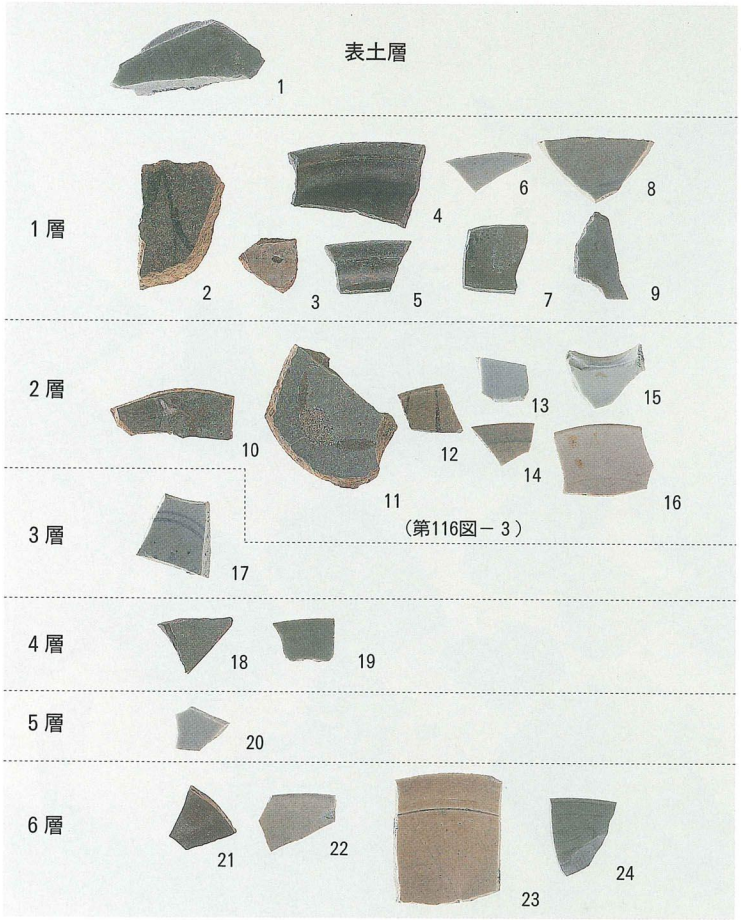


写真219 拝殿南調査区 陶磁器類（番号は表66と対応）

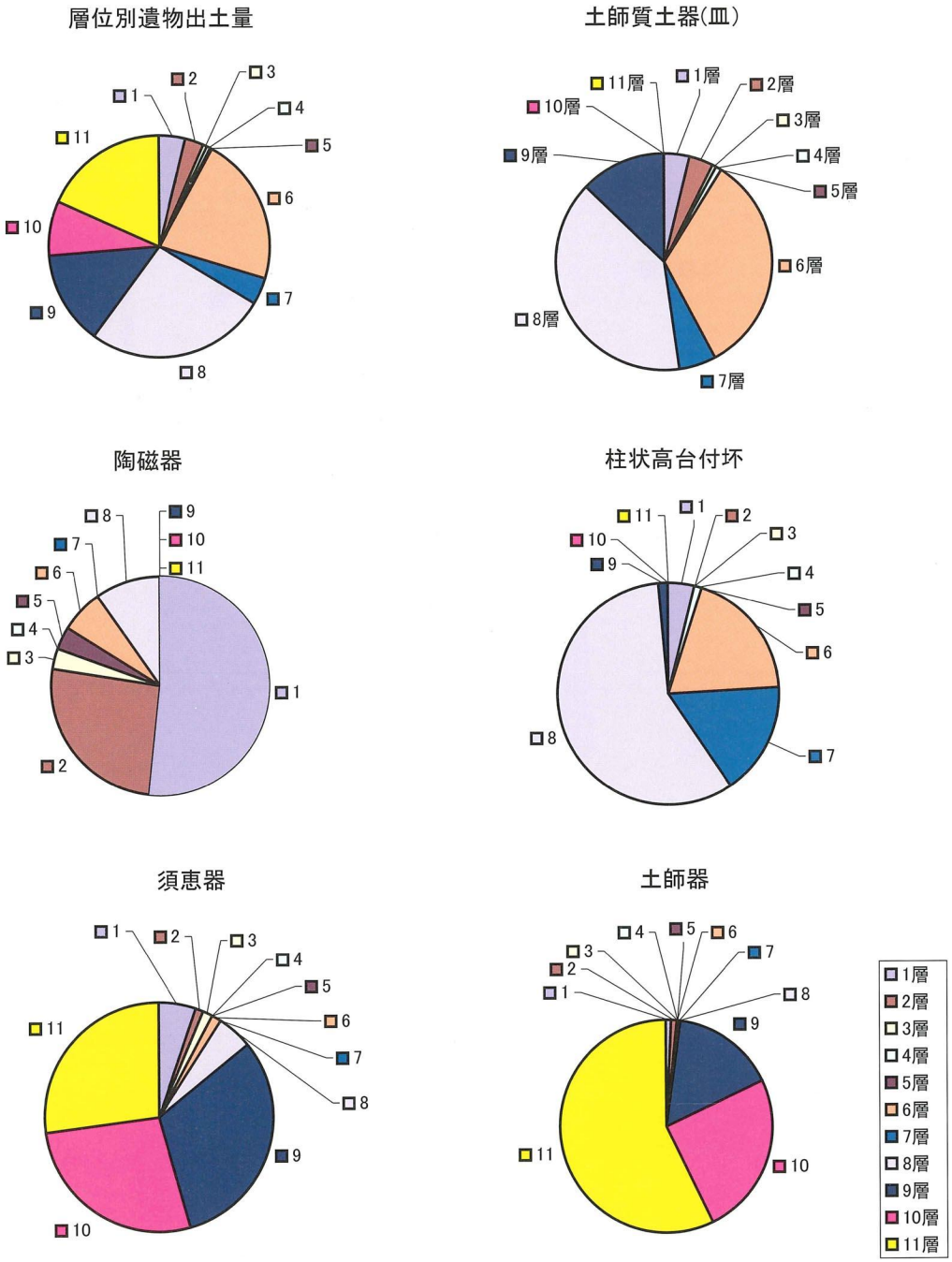
表66　拝殿南調査区 陶磁器（番号は写真219と対応）

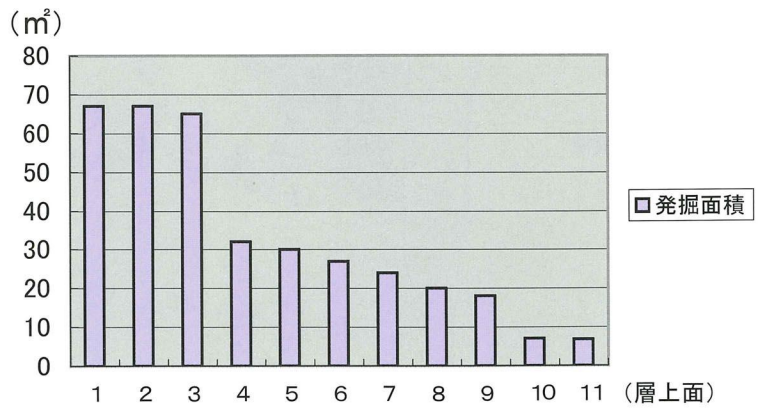
番号	層位	種類	器種	時期	特徴	図版
1	表土	青磁	皿	13前半	龍泉窯 草花文Ⅰ類	
2	1層	肥前系陶器	皿	17前半	鉄絵	
3	1層	肥前系陶器	皿	17		
4	1層	肥前系陶器	火入			
5	1層	肥前系陶器	火入			
6	1層	白磁	皿	15～16	E－１類	
7	1層	磁器				
8	1層	肥前系陶器	皿		陶胎染付	
9	1層	肥前系磁器	皿		古伊万里	
10	2層	肥前系陶器	皿			
11	2層	肥前系陶器	皿	17		第116図-3
12	2層	肥前系陶器	皿			

番号	層位	種類	器種	時期	特徴	図版
13	2層	青花	皿			
14	2層	青花	皿			
15	2層	肥前系磁器	皿			
16	2層	肥前系磁器	皿			
17	5層	青花	皿		C類	
18	6層	肥前系磁器	皿			
19	6層	青磁	皿		B－１類	
20	7層	白磁	皿			
21	8層	陶器	皿		褐釉・中国製	
22	8層	白磁	皿		Ⅱ類	
23	8層	白磁	碗		Ⅴ類	
24	8層	青磁	皿	13前半	Ⅰ類	

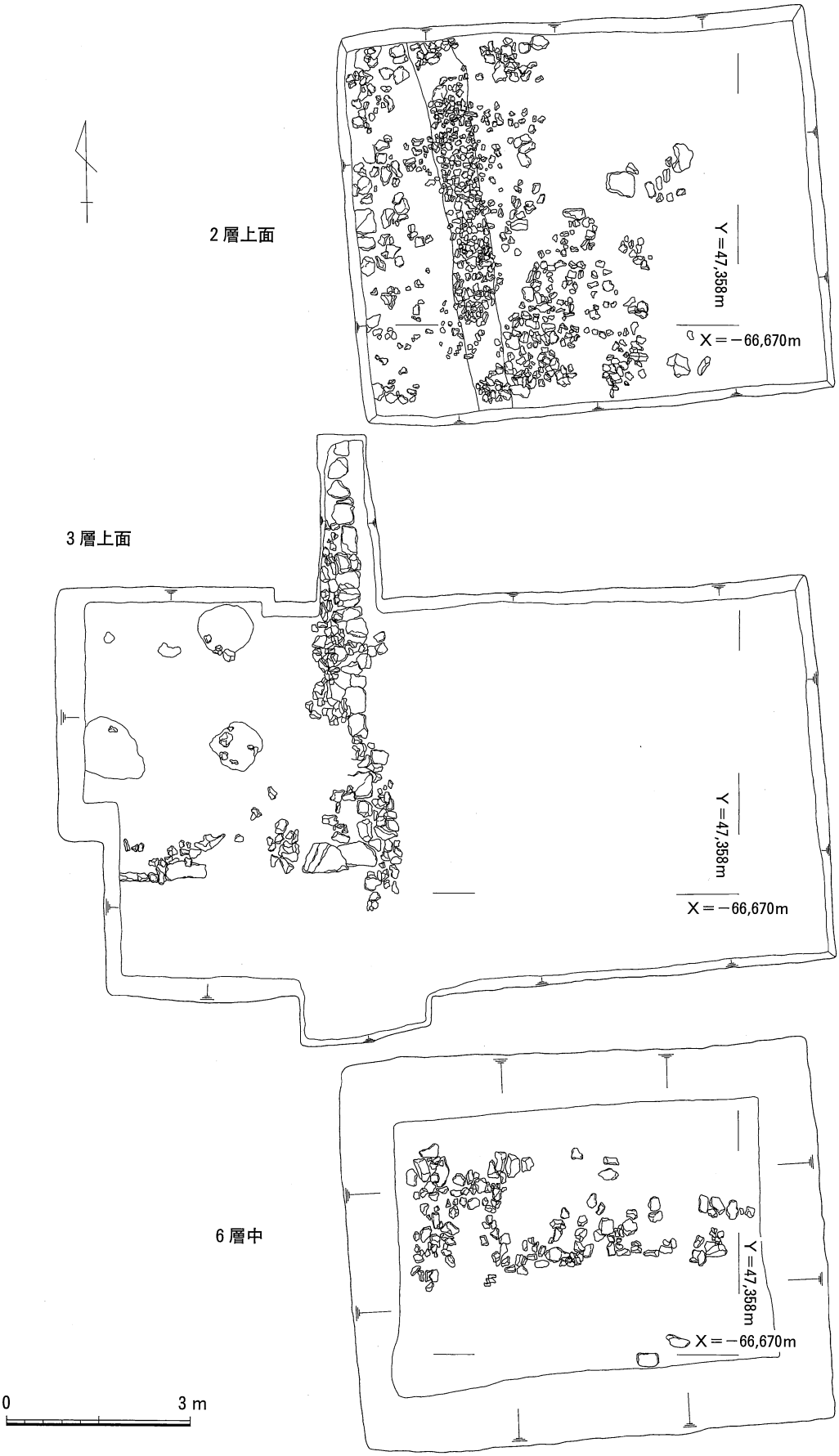
表67　拝殿南調査区　土師質土器・陶磁器集計表

種別	土師質土器		白　磁				青　磁			青　花		褐釉	肥前系磁器	肥前系陶器
器種	皿	柱状高台付坏	Ⅱ類	Ⅴ類	E－１	中国系	B－１	Ⅰ類	龍泉窯系	C群	その他			
表土									1				2	
1層	84	3			1								6	3
2層	84										1		2	3
3層	10													
4層	17	1												
5層	1									1				
6層	743	15					1		1					
7層	122	13				1								
8層	883	46	1	1				1				1		
9層	283	1												

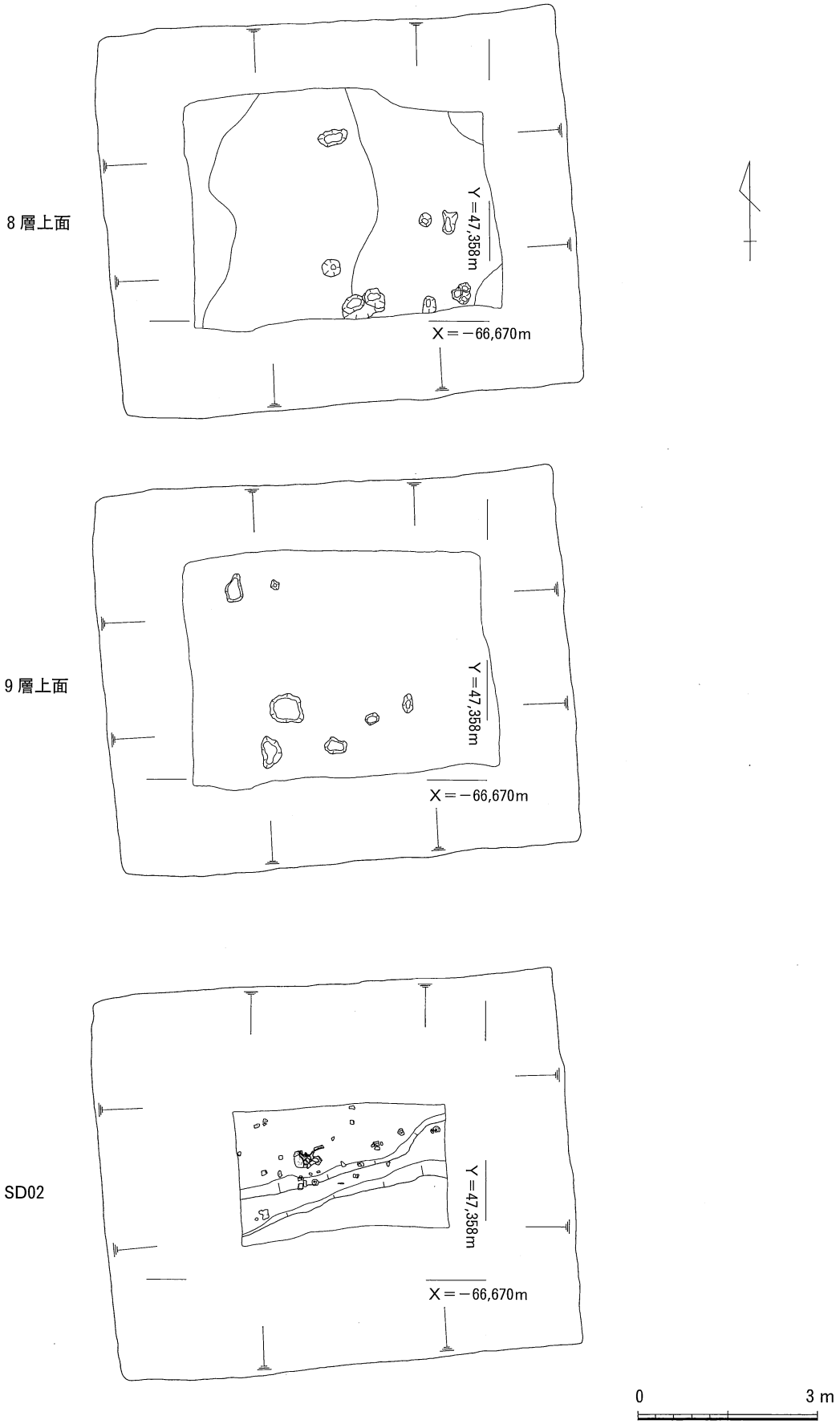




第130図　拝殿南調査区　出土量グラフ



第131図　拝殿南調査区　遺構面平面図(1)（S＝1/100）



第132図　拝殿南調査区　遺構面平面図(2)（S＝1/100）

第４節　検出遺構

(1)　SD01（第133図・写真220～223）

２層上面で検出した。

本調査区の西側において南北流れる溝である。検出した溝は南北の６ｍ分である。

溝は、現在でも機能しており、溝では北から南への流水がみられる。

規模は、上面幅約60㎝、深さ50㎝を測り、溝底面には、両側面に10㎝～20㎝大の扁平な石が積まれ、その上に30㎝～50㎝大の礫が溝中央に蓋石のように積まれていた。

機能としては、境内の雨水もしくは地下水を境外へ排水するための溝と考えられる。

年代については、SD01から時期を示す遺物が出土していないため、不明であるが、第２層に掘り込まれていることから、寛文度造営（1667年）以降に造られた溝であると考えられる。

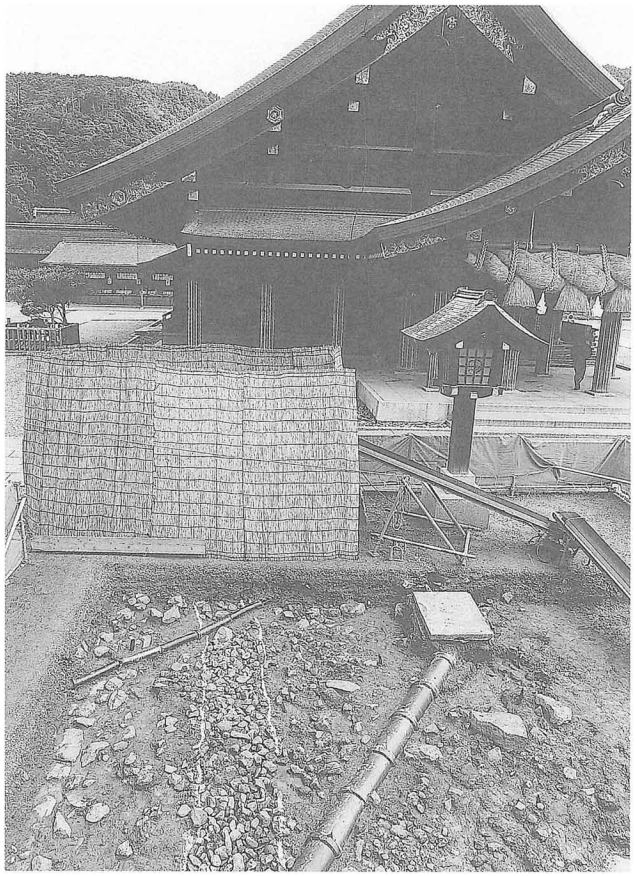


写真220　拝殿南調査区　拝殿調査区（南から）

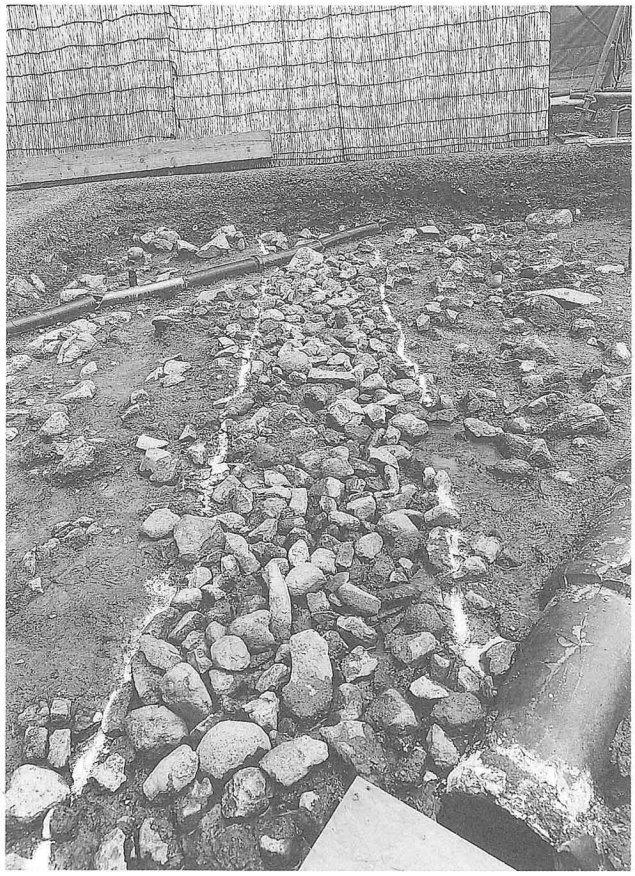


写真221　拝殿南調査区 SD01上面検出状況（南から）

写真222　拝殿南調査区　SD01半裁状況（南から）

写真223　拝殿南調査区
SD01蓋石取り上げ後の状況（南から）

第133図　拝殿南調査区　２層上面平面図（S＝1/40）

SB01（第135図）

３層上面で検出した。

規模・方位

調査区西側において南北７ｍ、東西４ｍの石列を確認した。

石列は南北・東西とも石の面をそろえて配置されている。上部は後の造成などにより削平されているが、側面に石を積む石積み基壇の基底部分であると考えられる。

石で囲まれた基壇内には、礎石を据え付ける穴SK01～SK03を確認した。

建物の南北軸について、検出されたSK01・02の中心点および南北の石列から方位座標軸に対して、反時計まわりに３°振れており、N－３°－Wとなる。

SK01（第135図）

規模・形態

規模は、0.9ｍ×0.9ｍの不整円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。土坑の周囲に礫が配されている。

覆土

青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付ける土坑であると考えられる。SK１～３とも土坑の大部分が後世の造成で削られており、土坑の基底部と考えられる。

SK02（第135図・写真227）

規模・形態

規模は、0.85ｍ×0.8ｍの不整円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。土坑の周囲に礫が配されている。

覆土

確認できる土層では、覆土は、２層に分かれ、上層に暗茶褐色土、下層に青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付ける土坑であると考えられる。

SK03（第135図）

規模・形態

規模は、1.20ｍ×0.9ｍの不整楕円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。

覆土

青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

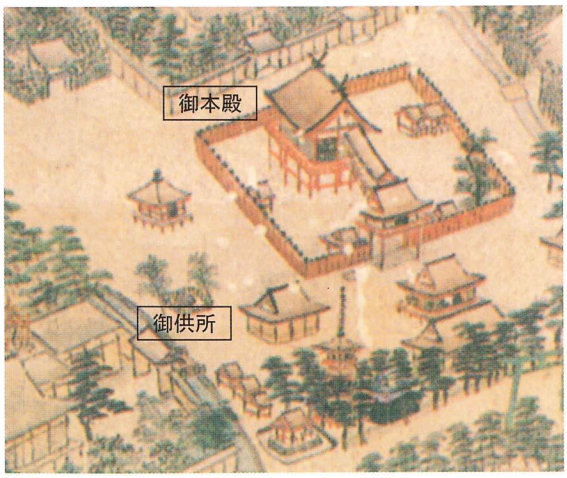
基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付ける土坑であると考えられる。

建物の性格

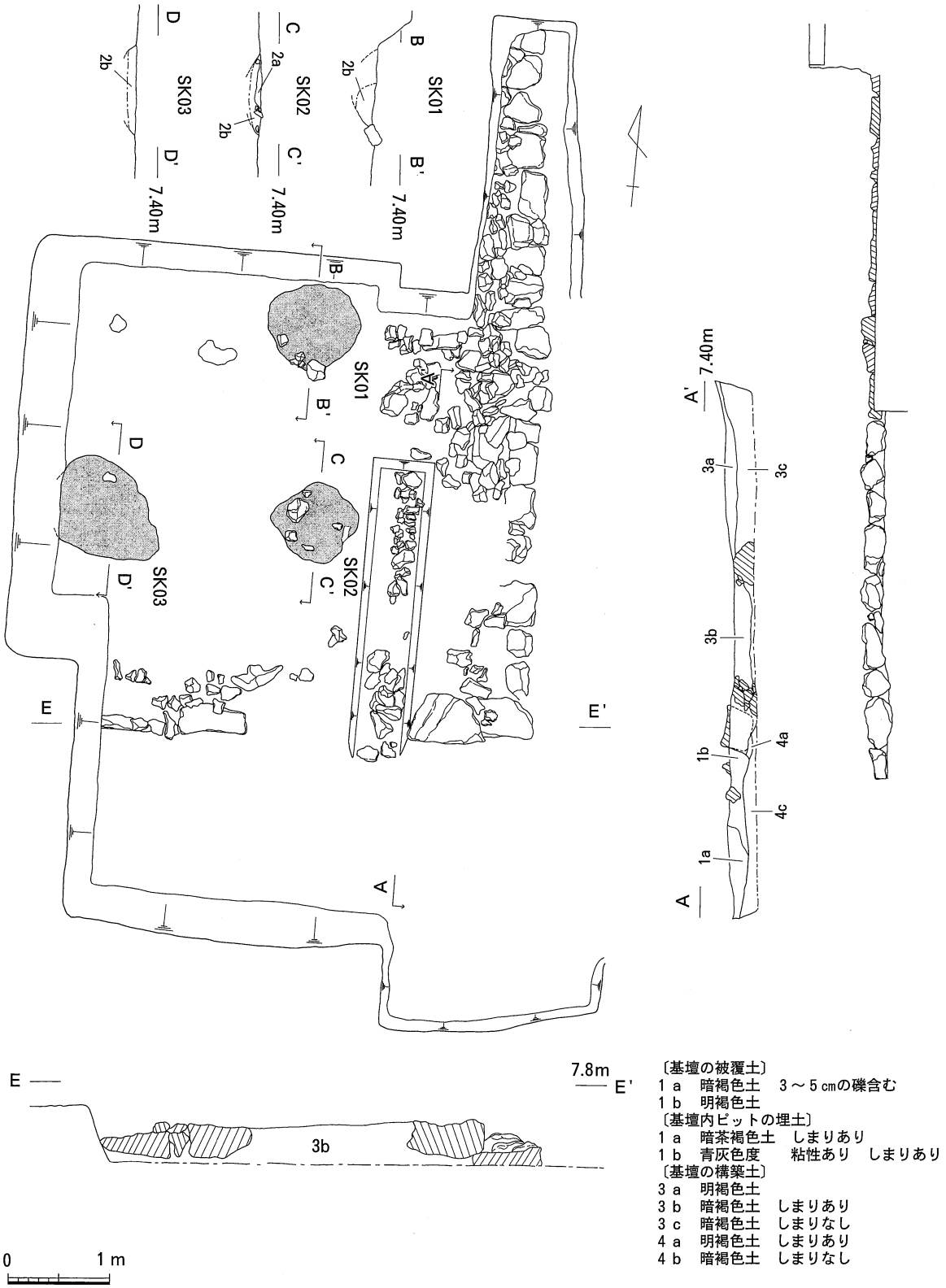
年代については、年代を特定できる遺物が出土していないため明らかにできないが、層序の関係から慶長度造営の建物である可能性がある。

基壇内で検出されたSK01～03は、おおよそ１間（６尺５寸）間隔で並んでいることから、『杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚』（千家国造家蔵）にみえる「一．御供所〈三間二六間〉」、また『紙本著色杵築大社近郷絵図』にみえる御供所となる可能性が高い。（第134図）

平成12年度の八足門前調査時に、慶長度造営の本殿跡を検出しているが、今回確認したSB01とほぼ遺構主軸の方位がそろっている。



第134図　『紙本著色杵築大社近郷絵図』にみえる御供所



〔基壇の被覆土〕
１ａ　暗褐色土　３～５㎝の礫含む
１ｂ　明褐色土
〔基壇内ピットの埋土〕
１ａ　暗茶褐色土　しまりあり
１ｂ　青灰色度　粘性あり　しまりあり
〔基壇の構築土〕
３ａ　明褐色土
３ｂ　暗褐色土　しまりあり
３ｃ　暗褐色土　しまりなし
４ａ　明褐色土　しまりあり
４ｂ　暗褐色土　しまりなし

第135図　拝殿南調査区　SB01遺構平面図・土層図（S＝1/60）

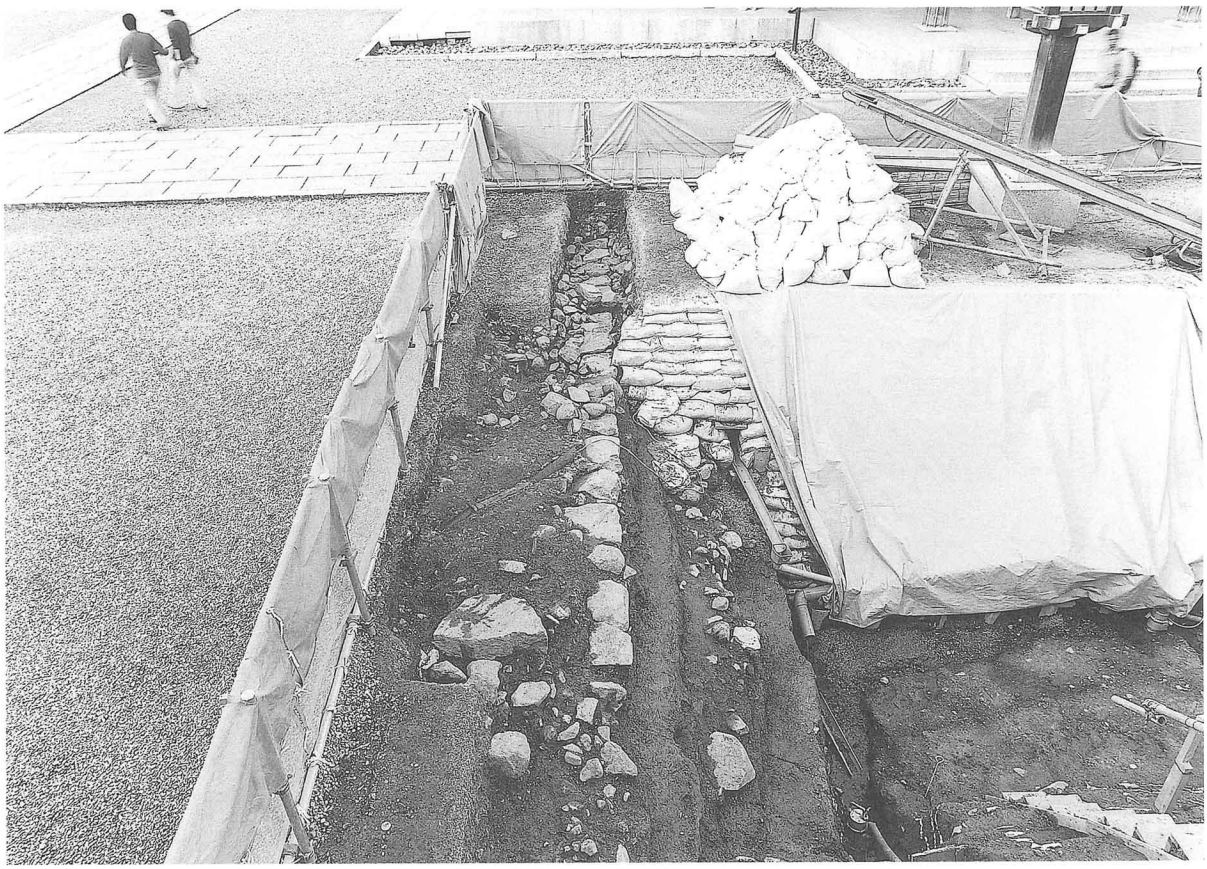


写真224　拝殿南調査区　SB01石列検出状況（拡張前：南から）

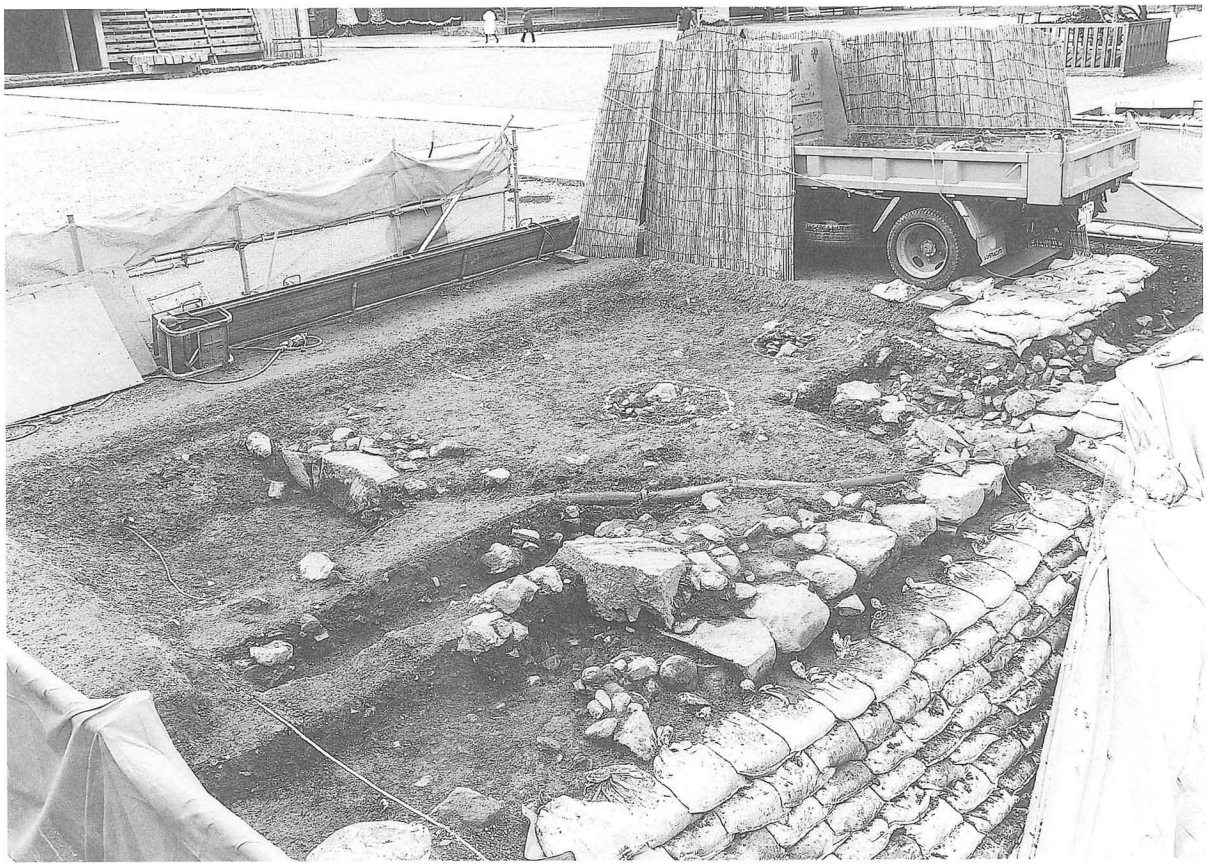


写真225　拝殿南調査区　SB01石列検出状況（拡張後：南東から）

写真226　拝殿南調査区　SB01土坑検出状況（拡張後：西から）

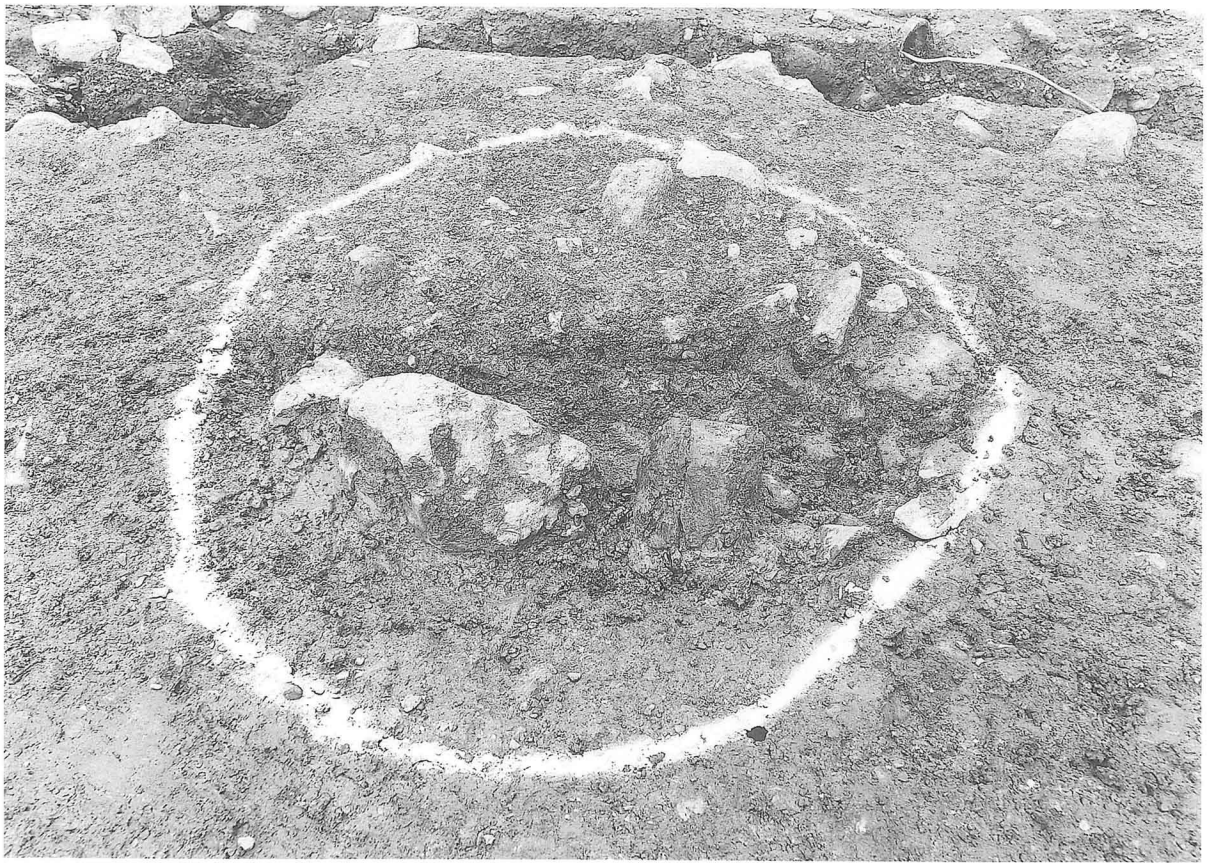


写真227　拝殿南調査区　SB01　SK02半裁状況（拡張後：西から）

8層上面検出遺構（第136図）

8層上面の遺構について

8層上面は、8層中出土土器の検討から、八足門前調査区の大型本殿遺構に最も近い時期の遺構面であると考えられる。本調査区における遺構出土量は、8層が最も多く（第130図）、人々の活発な動きがあったことがうかがわれるが、検出された土坑は、全て性格不明であり、大型本殿遺構に関連する遺構は、検出していない。

SK04（第137図）

規模

規模は、0.6m×0.7m、深さ14cmを測り、不整円形である。

覆土

青灰色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK05（第137図）

規模

規模は、0.6m×0.4m、深さ18cmを測り、不整楕円形である。

覆土

青灰色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK06（第137図）

規模

規模は、1.5m×0.8m、深さ30cmを測り、不整楕円形である。

覆土

青灰色砂質土で玉砂利を数点含んでいた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK07（第137図）

規模

規模は、0.6m×0.6m、深さ22cmを測り、円形である。

覆土

暗褐色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK08（第137図）

規模

規模は、0.4m×0.4m、深さ26cmを測り、円形である。

覆土

青灰色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK09（第137図）

規模

規模は、0.4m×0.7m、深さ14cmを測り、不整楕円形である。

覆土

青灰色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK10（第137図）

規模

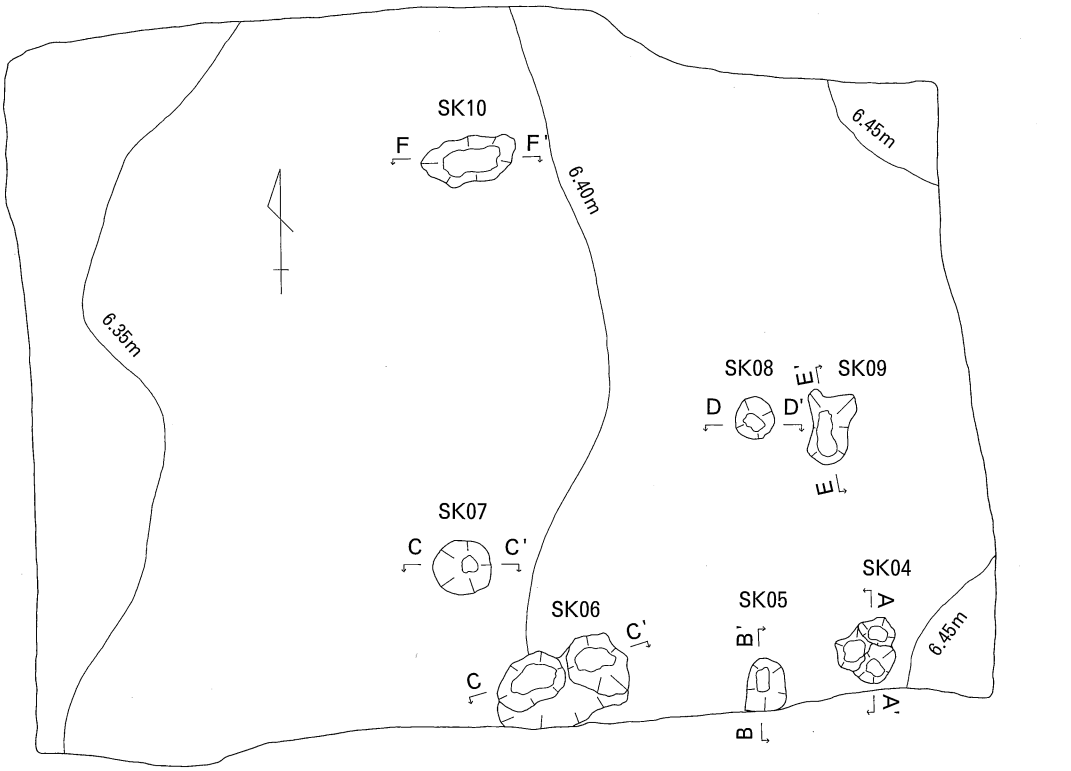
規模は、0.5m×1.0m、深さ25cmを測り、不整楕円形である。

覆土

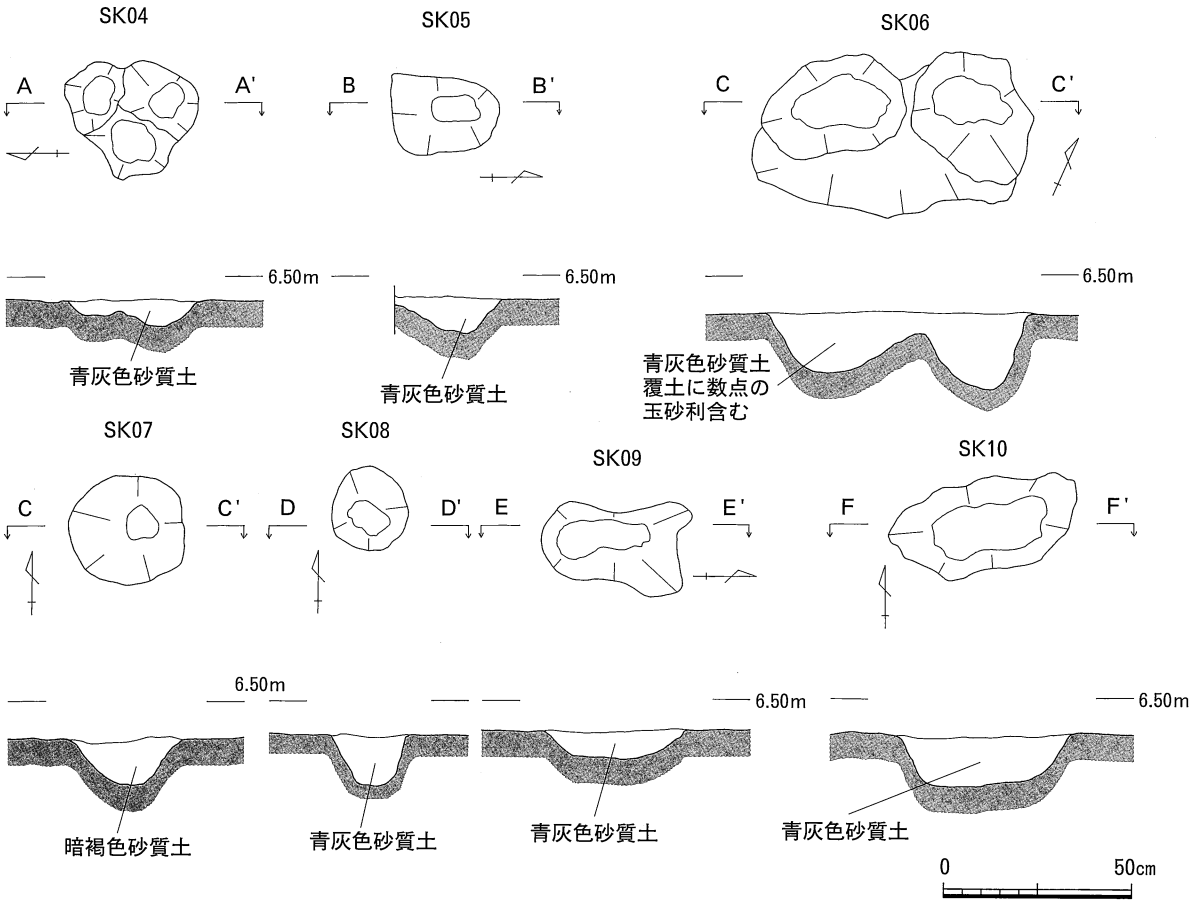
青灰色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。



第136図　拝殿南調査区　８層上面平面図（S＝1/40）



第137図　拝殿南調査区　８層上面検出遺構平面図・土層図（S＝1/20）

9層上面検出遺構（第138図）

9層上面の遺構について

9層上面は、8層上面遺構と同様に大型本殿遺構遺構面と近い時期の遺構面であると考えられるが、検出された土坑は、全て性格不明であり、大型本殿遺構に関連する遺構は、検出していない。

SK11（第139図）

規模

規模は、0.3m×0.6m、深さ25cmを測り、不整楕円形である。

覆土

明褐色砂質土が堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK12（第139図）

規模

規模は、0.3m×0.5m、深さ20cmを測り、不整円形である。

覆土

暗褐色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK13（第139図）

規模

規模は、0.6m×0.7m、深さ20cmを測り、不整楕円形である。

覆土

明褐色砂質土一層のみが堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK14（第139図）

規模

規模は、0.3m×0.3m、深さ26cmを測り、不整円形である。

覆土

青灰色砂質土が堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK15（第139図）

規模

規模は、0.9m×1.0m、深さ20cmを測り、平面形は隅丸方形である。

覆土

明褐色砂質土が堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK16（第139図）

規模

規模は、0.6m×1.0m、深さ26cmを測り、不整楕円形である。

覆土

明褐色砂質土が堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。

SK17（第139図）

規模

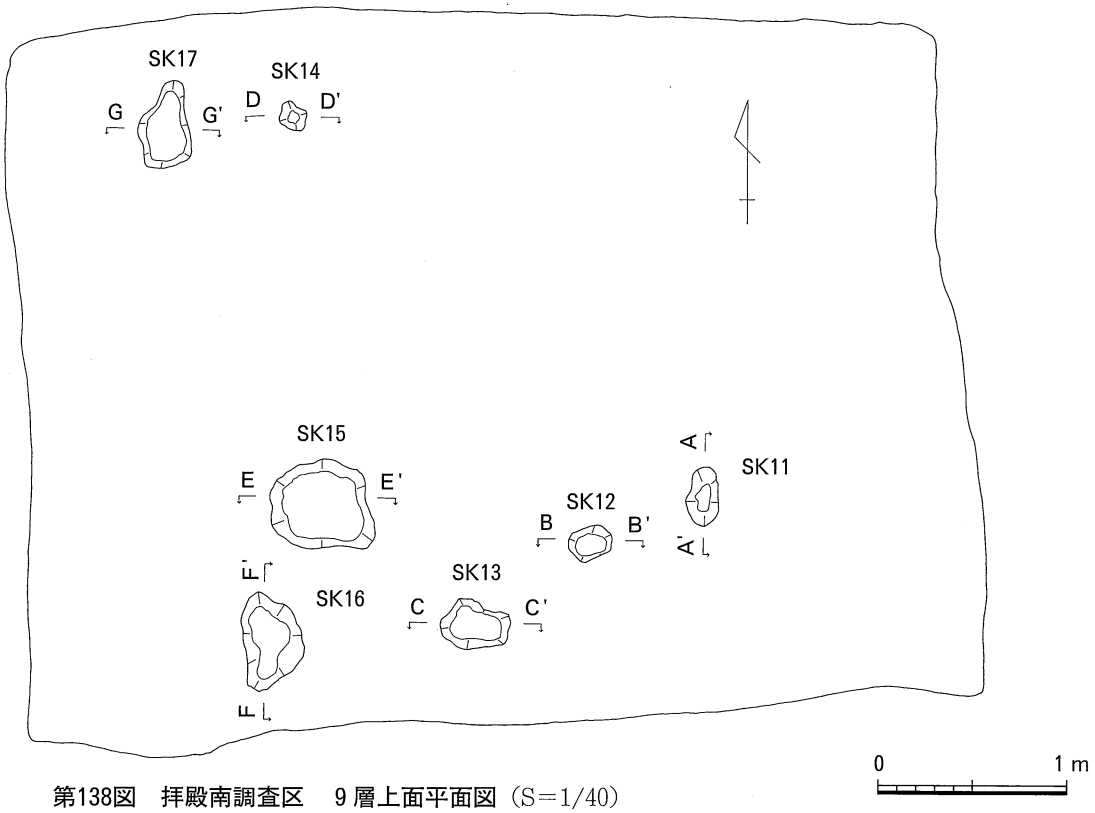
規模は、0.6m×0.9m、深さ20cmを測り、不整楕円形である。

覆土

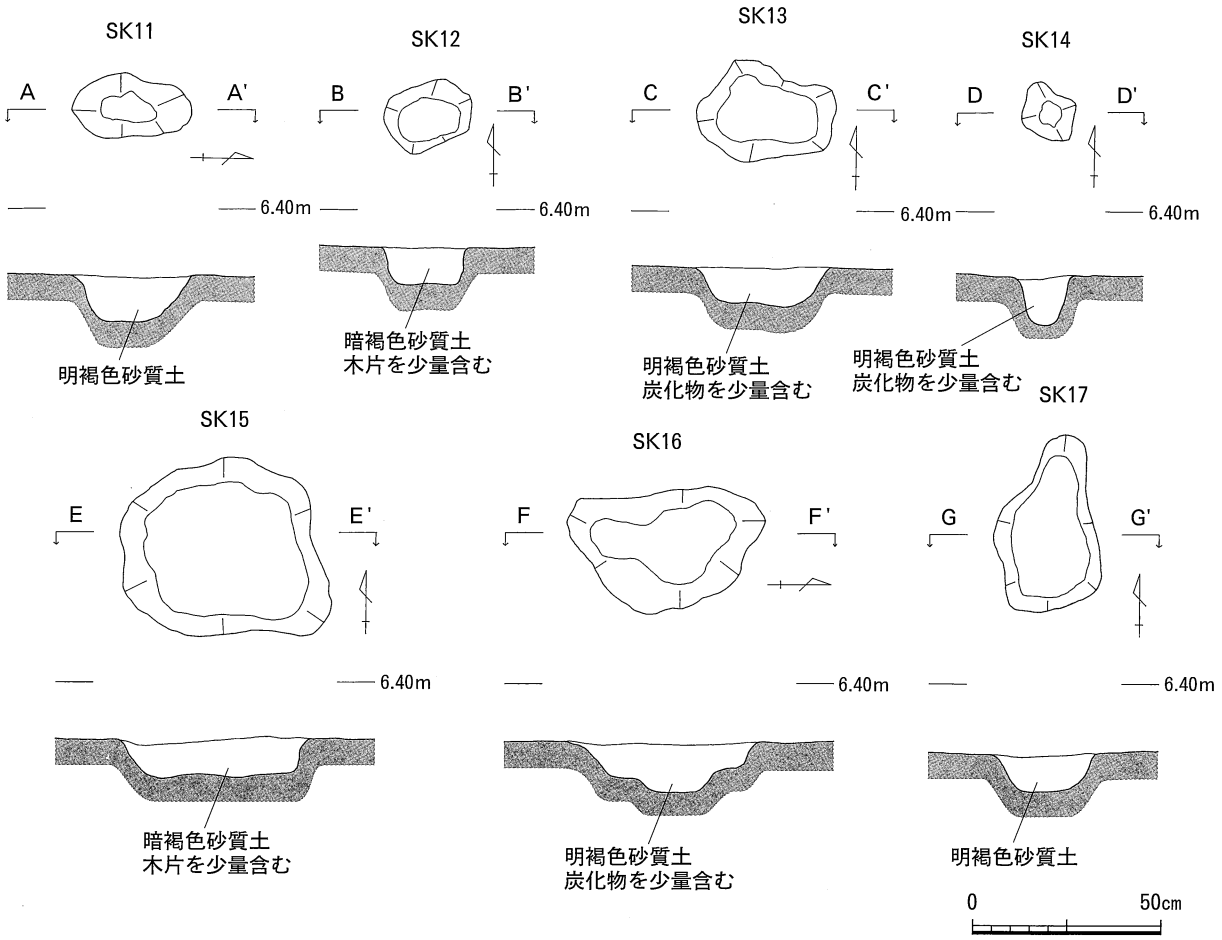
明褐色砂質土が堆積していた。

年代・性格

出土遺物がなく、年代・性格ともに不明。



第138図　拝殿南調査区　９層上面平面図（S＝1/40）



第139図　拝殿南調査区　９層上面検出遺構平面図・土層図（S＝1/20）

写真228　拝殿南調査区　８層上面検出状況（南から）

写真229　拝殿南調査区　９層上面検出状況（南から）

SD02（第140図・写真230～231）

調査区を北東から南西に流れる流路を流路の規模は大半が調査区外であるため不明であるが、調査区内で確認できた規模は、東側で、上面検出幅180㎝、底面80㎝、深さ28㎝。また西側で上面検出幅240㎝、底面120㎝深さ44㎝を測る。

底面の標高差からみると、流路は北東→南西の方向に流れていたと考えられる。

SD02底面が南から北側に落ち込んでいることから、調査区南端では、流路の南岸が検出されたと考えられる。埋土は１㎝から３㎝程度の円磨された砂利であり、SD02は緩やかな水の流れによって形成されたものであると推測される。

流路の肩（水際）には、須恵器の長頸壷２点、坏身１点、横瓶１点が集中して出土する箇所があり、人為的におかれたもしくは捨てられたと考えられる。

出土遺物（第141～142図・写真233～236・表68～70）

１～12は、須恵器である。

１は、坏身である。口径は12㎝であり、大谷編年Ａ７型、高広編年ⅡＡ期に該当する。

２～５は坏蓋である。２は、つまみが宝珠形であり、口縁内面にかえりが付くことから高広編年ⅡＢ期、出雲国庁編年第１形式（７ｃ中～後）に該当する。３は、口縁部にかえりがないもの、４・５は輪状つまみをもつことから、高広編年Ⅲに該当する。

６は、高台付の坏である。底部高台内ヘラケズリであり、高広編年ⅢＡ期。

７・８は、長頸瓶である。７は、頸部が外反しており、大谷分類４型（出雲８期）、８は、長頸化し、口縁部が直行することから大谷分類３型（出雲６期・７Ｃ第２四半から３四半）に該当する。

９～11は、高坏である。９は、長脚高坏で、脚部に２段３方向に透かしを入れる。また、脚端にやや外傾するしっかりとした面をもつことから、大谷分類のＡ２ｂ型（出雲３期６Ｃ第４～末）になろう。10、11は、透かしが切れ目となっていることから、大谷分類のＡ４型（出雲編年３～４期・６世紀第４四半期～７世紀第１四半期に該当しよう。

12は、横瓶である。口縁端部に面をもち、体部外面は、平行タタキ後、回転カキメ、内面は、同心円文オサエが施されており、高広編年ⅢＢ期に該当しようか。

13は、土師器甕の口縁部。

14・15はいずれも土師器甕の口縁部で、口縁が「く」の字状に外反して開き、端部を丸くおさめる。古墳時代後半以降。

16～18は、土師器の高坏。

19は、手づくね土器である。内面にはケズリがみられ、外面はハケ目がみられる。

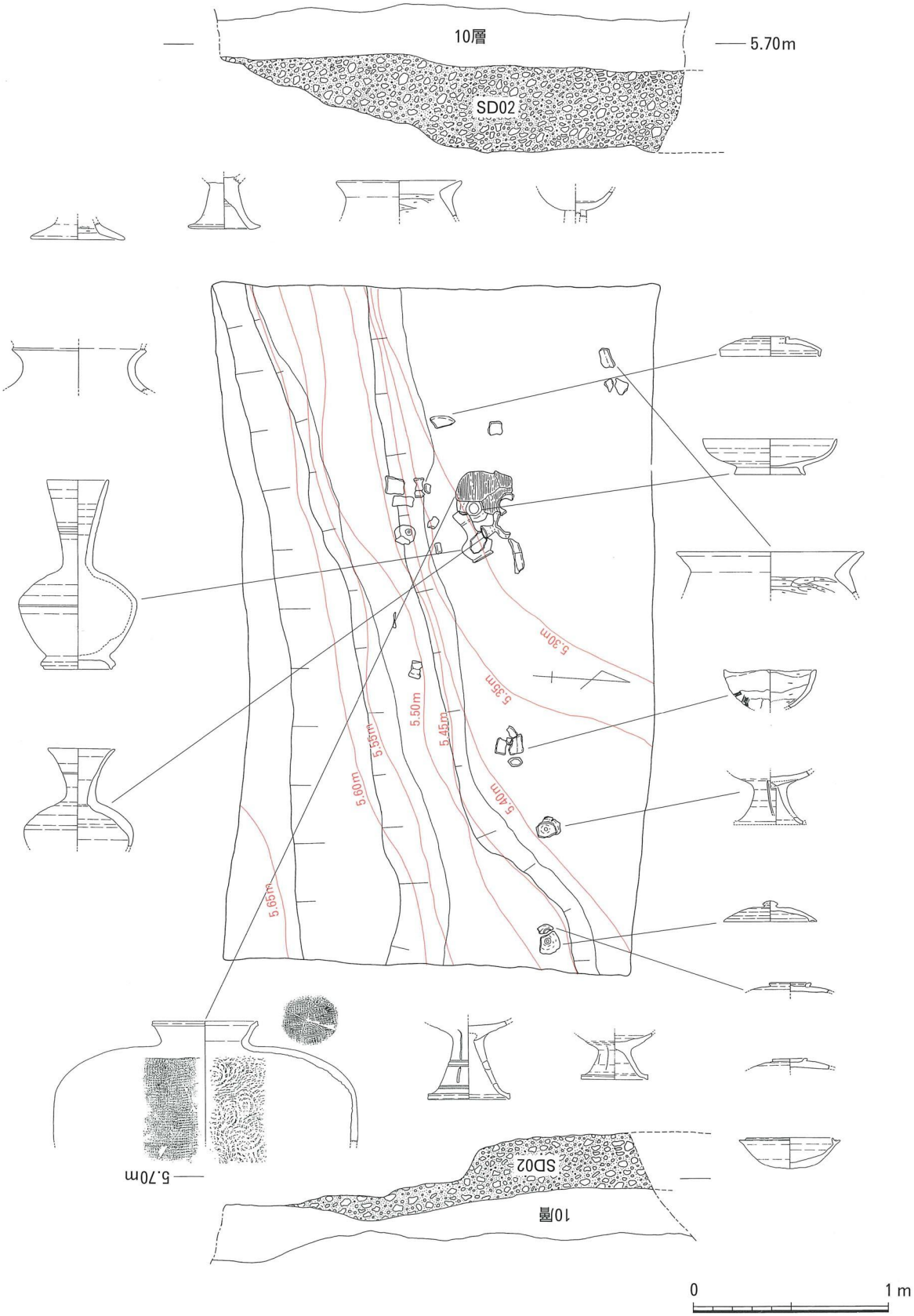
20は、かまどの脚部である。

流路が機能した時期については、流路肩の須恵器が７世紀後半代と考えられ、また流路埋土上層には８世紀前半の坏蓋が含まれるため、流路が機能した時期は、７世紀後半代から８世紀前半と考えられる。

写真230　拝殿南調査区　SD02完掘状況
（南西から・土器は再配置）

写真231　拝殿南調査区　SD02完掘状況（南から・土器は再配置）

写真232　拝殿南調査区　SD02遺物出土状況（南から）



第140図　拝殿南調査区　SD02遺構平面図・土層図（S＝1/30）